







明治六年冬西曆

an. S. John.
1873.

明治六年癸酉新著

約編傳編考書

東國宇院城阿度留布保流都方前版摺屋藏活字

よむんのよろこびあそびれそつこのちよりの

よむんの上とびかをぐれとつてそのまじりの

第一章

一節

よむんはよかゝそのののりかゝそのののれととのふりまを
かゝそのののれをたられ。このうゝそのののれよむんはれととのふりまを
よむんのりかゝそのののれをのりてよむれりよむてよむれりよむののれを
のりてなさればよりといふよむ。よむんはかゝそのののれよむり
よむりといふよむんごんのひりり。ひりりハんよむあてんよむハんよむを
よむんよむ。

よむんはよむんをよむる人あて名ハよむん。かれきりてひりりのよむ
よむりよむりり。よむれをのりてよむんぜらよむ。かむんかのひりり
よむらばよむかのひりりのよむよむりよむのよむ。よむとひりりハよむの
よむんよむる人よむよむのよむ。かれせよむよむよむよむよむハ

よむんのよむんをよむる人あて名ハよむん。第一巻

さうなるよじてまううまて日れまうけるせんハせんのかあ。 十七

あふハもせよりさぐけくれてせんときことハ多そんれまをよせま。 十九
んハ能をみるあゆみとゆうまふぬのむせとちくのふとてりぬる
ののこまごのまふふのびぬひける。

十九よまんのまやうこかのエーよこども多るされんよりまうりつうこととせむ
んとをやうてよまんよとひてりなくんぢこれぞや。 二十一よまんハうけが
かゝるばりまーうけがてりなくこれハませとよふだ。 二十二ひなくまうら
るばどひまやうひなくのど。 二十三ひなくまはるののうりくからだ。 二十四ひなく

るんぢこれぞやゆめて口れかとつうりそのの又へんとうをまづーかん
ぢまはらうふとひあぢ。 二十五ひなく口れちよゆてよまふののくそまわ
のまはとまはたせよとまはるのひひるをまうり。 二十六つうまんま
まののくまはーまはたせよ。 二十七ひなくるんぢんれまをよふだ

一ノオノ... 巻一 三十一

らせやよふばさまなるのふふげんなるをあらふれはるや。よまん二十六
のりなくこれまづとゆてゆふれはるしるんぢらぐうふとつもの
のりなんぢらるざるもの。二十七ののんロダのぢよまきこりてまううまてロダ
さねよひほてするをちそのちのせくとふもこれのふげんものなり。
二六このふとくくよまればん二六の川やうむらのべあをらばるをちよまん
ゆふれのはるとまうよるりこり。

二九つぐ日よん二九のそそおの色よつく工をみるはるをちりなく非のこひつド
せん三十一のつみとのぞなるのそとよ。三十一これロダのぢよまきこりてロダまきふひまー
そののそとゆてこれにまきまうとしをゆるのハはるをちこの人
なり。三十一これのとよりまをまらばとてををいせらませよあふたはぐとめよ
三十二まきこりてまをゆてあらふれは。よまんまふまやうこまてりなくこれ

聖非えまのいく天よりふうてかれれうへよとまををえこり。三十三これ

くねがかの日ともよむか。四十一そのよたんをまのてまうまて及そよまふ
のふりのうちいんまのんへてろぐまやうぶゆんてまやうり。四十二かれん

まがまやうぶゆんまのんをくねねつけてりまぐねらハめまやううて
りんがくれまをくねねつけりくれまをくねらうをねねつけるりの

り。四十三つひよこれをくねまて及そよまふまか。及そこれをんてりま
むくまんぢりほよあぐむまをまのんまふけいハめととあまううて

りんがへてろ。へてろとハりのりまう。

四十四つぐ日及そのがまぐよゆんとまるとまひまびいよめてりまのんく

られよまふんよ。四十五それひまびいハまのんゆのんゆんてまやとへてろとあま

むらうり。四十六ひりびいハまあまをめめてりまぐもせのまらやよはむひて

ままあるののまもかやあるはとまのめハられらまふとねよ

のひくりまをたらまふまのんよせまのむまて及そり。四十七まふまの

むしるひりひい入るゝあそとあそいでいたくも世のまをよよあひて
さまあるのどももかたある故とところののハこれらまごふこれよ

四十七

かひこりまるとちあまのんよせあのむせと及そより。まゝ及の
いたくまされよりよきといひるや。ひまひのいたくまこりてん。

四十八

及そのまゝ及グあねつくとてこれをゆびぎていひあそく
これまゝといはら及人いんをたなきめのより。まゝ及グいたく

四十九

あそくよつてそれとあそびふや。及そのいひあそくひまひいんぢと
よとざるのさねいんぢうきのうあまのまゝとまゝとまゝこれまゝと

五十

ぢとてんこり。まゝ及グいたくらびあそくいまゝ那のむせとあそく
いまゝいぢら及人のこりより。及そのいひあそくこれいんぢとうき

五十一

のうあまのまゝとまゝととてんこりといふよつていんぢあんぢるや
あそくまゝこれよりあひあそくをてんとま。まゝいひあそくこれ

五十二

まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと

びひてぎんとうるものごものうねをかごぎきてそのごのをこませ。
 ちとせうものごもよひあていひぬらくめろこのめのととりさうて
 じがちくのまやとあきあひまやとあけこるれ。ていごも^{十七} 鍾よりんぢ
 ぐまのりさちこれをつらうとくいとかくとをあむへうり。よごのの^{十八}
 こへていたくあごまごふこれをうせハるんのめがらまきばるを
 日れらよませるや。及そのいひあをく^{十九} んぢらはてらとやぶれよこれ
 三日又これをこてらん。よごののいたくはてらとこてら^{二十} 正四十六
 年らんぢハ三日又これをこまや。よご及そハあれの刃のてらと
 さしてちうのひあふ。ゆあ^{二十一} 又かきあるるものよりいきがるのち又
 ていまごよすの正をわむへいごて鍾と及そさるのいひあをる
 正をこをらんぢへり。

二十三
 及そのるるされん又あてまごよまごこのるせつ又んそのあごるふ
 二十四

ていまたよすの正をちかへいして往と及そさるのいひもなる
工をさとらんごり。

及その名をされん又あつてまさよとまぎこゆるせらよんその母とるふ
ところのふまぎなるを記してその名をまんぢるものあや。及その人
とあるゆゑ又あのをとわかれよよのまぢ。 ^{二十五}まごんのうち小るにありと
あるゆゑ又これら人の工をまやうこむるとめちらず。

第三章

一節

ふじすのんあり名ハ小こでも。よごどのつうさごりあり。 ^二及そ
及そさるよつきていたくくらび ^一されふありん非よりまごり一とまやう
とるとあるげうゆゑこのあともよところのてんまご工非のよまけよあふ
むんバこれよよくこれをあともよ一なり。 ^三及そのこへていひをなくこれ
まごぢらよるんぢよつごん人まごうまれる小あふむんバ非のんあを記る
工のよまぢ。 ^四小こでもいなくんまごよあごりかんをすへうまると
るをえんのよよくまごよまぢむくのまらよひやそうまれるや。 ^五及そのいひ

ふじすのんあり名ハ小こでも

然るにこれまことおつよらんぢ又つんらん三つあて御聖神あてうまれる
 小のらむんバ神のくゆくゆくかとのこをば。ゆくよりうまれるハゆくなり。^六
 御聖神よりうまれるハまさきなり。これ。らんぢかあらずま^七
 うまれるといふハらんぢめづれとまるとるれ。かせのけくもあらずれ^八
 かくらんぢそのこをまさきもいづくよをまさきりいづくよゆくとを^九
 むらばむらむら御聖神よりうまれるハまさかとのこを。
 小こでもいなくこのこより又てよくるや。及そのこへていひあつて^十
 んぢいせら及まぐひとのまをやうるかのまごこれをまらばや。これま^{十一}
 ぢらよらんぢ小はげんこねらるるところハこれをいひまるところハこれを^{十二}
 まやうこをまやうあてらんぢらこねらるるまやうことうけは。これま^{十三}
 とりへばらんぢらまらばいれんや天とるとりへばらんぢらあよとく

んぜんや。^{十三} これものまご天よのわののあはばと天よりくたりて^{十四}

まやうこそまやうをてんぢらにわらうまやうこそうのほこれに
とりのバるんぢらまんぢびりたんや天よるとりのバるんぢらのみよとく

まんぜんや。^{十三}これもしまび天よのわらふののふびと天よりなかりて

まざるののまざるをちんぢんのむせとるか天よとるのの。^{三十四}まらう

ませのれちよのてふびとのなるがごとくちんぢんのむせとすかあらば

まらうのげふれて。^{十五}まらうをこれとまんぢるののハわらをばしてかぎりまら

りのちとまらまかゲとの。

^{十六}はらう神せんとかのわどあへてそのひとをさうまらばのむせと

まらふてまらうをこれをまんぢるののわらをばしてかぎりまらりのち

とませまらため。^{十七}かう神そのむせとをせけんへはらまらせんと

まらまらまらよのふびりまらせけんこれをのつてまらまらるがためなり。

^{十八}これをまんぢるののハまらまらまらせられずまんぢざるののハまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

せざりたるゆゑなり。それそのとがさだめたるハこれかやひよりせん
 へきたりてまううおそ人さち今なきとのたるとゆかりよりたぎ
 かりそのまうへのいみかるをまつてなり。よつておそそのいみとま
 ののハひかりとさくらふてまううおそゆかりおつうばそのまうへせめられん
 ことをおそる。まこととまのハゆかりよはくゆつてそのいかり
 ぬくおせふれてするちちゆあてかきまたる也。
 三十一

そののち及そとていともとよてやのちうへ小のりてかきまのつて
 三十二

これらともよすまひてのらふれへいゆふ。まへよむんのらふれへたる
 三十三

といはんよありされんよちうよつてそのとらうりまがわわらんまへり
 三十四

てぬふれへせむ。とまよよとせんらうやよいまむのまふれざりり
 三十五

よむんのていともとよいともとまのれへよむるよわめてひやうむんかそれらう。

三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 よむんよつていむくらがよれんのりうよむんちともよよとてん

てぬふおのせむる ときよよとんらうやよいまじりまふれざりたり
三十五
よまんのてーどもとよよどもとまねのよまるとおほてひやうもんかこれら。

三十六

よまんとつきてりなくらびよれまんのわらゆるんぢとともよまてま
ぢもよまよまやうこーなるのハエとよかまかまのゆのらふれはまら
うーてまかこれ又つく。 ^{三十七}よまんとつきてりなく天よりさつげふよあふげん
ばんか又もうけるよのまば。 ^{二十八}なんぢらまづらふられれまよあふげ
りまーそのさままじりてはうまるとりひなるとまやうこまべー。 ^{二十九}まよよ
あめのハまよむとまりままよむこのまよまらてこれをまのてま
むこのまの ^{三十}ゆまをまよまよま。このログよままびまこり。 ^{三十一}かま
かままぶんをるこれハかまままげんまままなく。
^{三十一}う人よりまあるめれハめろくのう人まよりのめハままらひまこ
ハまままこり。天よりまあるめのハめろくう人ま。 ^{三十二}かまもまづら
んままこまこまとまやうこーてまらうまてんのそのまやうこまうけだ。

よまんのてーどもとよよどもとまねのよまるとおほてひやうもんかこれら

三十二

一

のひびきをくこのまがとのあぶかるふばまかこく。 ^{十四} じににがのあふるところ
 のまがとのむののへりぐもかこふばまににがかまよのふとところのまが
 かまがうらよあつてりばまよるつてにまににがかまりるまのりつらよ
 かつぶ。 ^{十五} あんががりたたくまににまににまにとにねよあふてにれをまて
 かこふまばまこくへまへるにたうらにめよあへよ。 ^{十六} あそのひびきをく
 ゆきそらんぢがむととよへまこれよ。 ^{十七} あんががりたたくにれあむとる
 及そのい初のたくるんぢあつとまきとよへ入ぜり。 ^{十八} けいーらんぢむら
 むのあつとありまへいあふるところののへなんぢがあつとよあふば
 これらんぢがりよとところまことなり。 ^{十九} あんががりたたくにがにるよまにに
 ばるたちさまあるののり。 ^{二十} けいらがせんをひやまよあまにまにに
 たりまにらんぢふいたくあまにまにのむとところへままふ及るされんよあり。

^{二十一}
 及そのひびきをくかんるにれよあんげととまにのりてらんぢふ天

これもあるあをうのどめをそもく かんをかんゑとのひふやとをなば。

二十八

かんゑハとんごをかきよほきてゑろよゆきてん小くをせりたぐ

二十九

なごりてつちんをえよのどより日かほあふさころハかれいぐ

三十

くこれふりひごりこまればと小あふざるや。ゆろくもろよりいぐ

及そよつく。

三十一

そののひびふてーどもこまぐハらびあそくー強ぐよといふ。及そ

三十二

のひぬをく日れるんぢふあふざるくらふべきかてあり。てーどもあひくこり

三十三

てのたぐあふかきとあそくせーむるよめちまごるののありとるや。

三十四

及そひ強えなく日れをつらなぬののむゆ又あふがふてあろうとてその

三十五

あふとをほむるハするまち日かてあり。さんぢふのよるハ四月又とて

三十六

あろうとてかるさきのこるとのたぐんやえよかみ日れるんぢふ小かこん

目とあけてえうをこんちまごよあゆくゑてかるべ。かるののひようざん

よこぎもり多むるのゆりたへりまのり日ねあむのり工よ

まふあふだ。こゝ^{十一}てりたへりれとりあるもの日まよねととりて

あうあてゆけよとりひつかり。まひてりたへりんぢふねととりて

ゆけとりひつかりのこれぞや。そのり^{十二}あるものこれぞとあふだかのと

人あわくあてあうあて及そありぞきてとりあむなる小よるとり。

^{十四}のち小及そととてりよあてりひのたへりこたかかるとりあむ

工とあくりまふつをあつて工なれあそへりさうよのーま工よ

のん工と。その人^{十五}ゆきとりてよこぎまよあのをとるあまの及そ

とる工とつげ。よこ^{十六}ぎま及そりあふ日よあひてととをあむ小よ

てあまのあひてととととんとあふ。及そりひあむとくひままを日

あへーとととる日まよ又ーととと。よこ^{十七}ぎまのりまーのり

とあふよとてとととと日とあふまのまふあふのりまーまのり

グ父よりといひおのを神とひをうりり也。

及そのひ強んくこれまをさうらんぢうよつげんむせとの父これをさる

正をんげんバミぐうらよくうあもせだん父のさるところのむせとも

まへこそとせん。 ^{二十}けい父むせをのへーおのをグさるところをい

くこれよあめさむさうらよむおひるる日ごとをかまよあめーてるんぢう

とそてあやキーめんと。 ^{二十一}ちくおさるののをむていさきぐうむグい

むせともおのをグあさるるところのののときさぐま ^{二十二}いとまへあうり。父

これもいさだいさだ ^{二十三}いとむせをかさぐけて。めろくむせを

うやまふいとちくとうやまふがごとくよせいむ。むせをうやまなごるののハ

はるをちむせをはるをまの父とうやまなだ。

^{二十四}これまことさうよらんぢう小つげんこグ ^{二十五}いとをさうてあううあてこれを

はるをぬののとまんぜバかきりかきりのちをさてとグ ^{二十六}さあめよ ^{二十七}まあふだ

はるたけのそとをんげかぎりなきりのちをきてとがさきあよきあふば
りまーあよよりみる小り。 二十五 されまことおら小なんぢらりはん
とまかひりてりまのりあよののままへ神のむほこのと多と
あひてこれをまへへの入かむばりみる。 二十六 父あひまぐうちふりのちある
ととりむほまかまあひまぐうち小りのちあることをままふハまこまうり。
三十七 かのかまひりまあひとままふてのりてと及工をまらめんそのめんげんの
むほまこまよよとあり。 二十六 むんぢらこれをのりてめがじととる工とありれ。
よとてまきりりるまをてはううちふとるののちをめんげんのむほまこの
と多とあひて。 二十五 むんじとまぜんとる及のへのりのちのめがくくとる及
のへのりまーめのめがくよ。
三十 されまづらふあまよととる工なへまかへとかりと及工とま

はるたけのそとをんげかぎり

第五卷

十四

とぎりよめてこれおのまぐころとのおめばりまー父これをつら
めくころとめ。 三十一 此れおのまぐこめ又あやうこ此れバあやうこハ

此るちちまことめ。 三十二 ぶづ又ログこめ又あやうこ此るめのあり此れも

そのログこめハあやうこ此るのあやうこまこと此るを。 三十三 さんぢう人を

やせてよん又つらめこり 三十四 かれまこのこめハあやうここり。 此れ

あやうこをんらりめとめばこさんぢう此るのこめハ 三十五 工をりよめ。

よんりまーめとめばこさんぢう 三十六 此るふくそのひらりとこのあめ

こり。 三十七 ちちまこ此れよんよりおわひるのあやうこののありけー父

のこれ又あやうおめ此るよこまこ此る 三十八 此れをつらこり

あやうこ。 三十九 此れをつらこりこの父まこ 四十 此れ又あやうここり

さんぢうもそのこめをいまだまらばそのまごをいまだんば。 四十一 その

とこりさんぢうがころにぞんぜばさんぢうかまがつらこりこり

のめをぞんぜばさんぢうよよとこり

あやうこせ。これをつらな〜このの父ま〜
かんぢうのうもそのこ多をいまださうばそのまぐ〜といまだいば。その

三十八

こそりさんぢうがころにぞんぜばさんぢうかまぐつらな〜このころ
ののをえんぜざるよよてなり。

三十九

さんぢら 種どもとさむまよよてさんぢうそのうち又かぎりさきの
いのちあるとわめゆ。種どももこめふあやうこせのののこれなり。

四十

さんぢうこれよつきてのちとえんとせん工をわかせば。これハ

四十一

うやまをるとんううけだ。いまだこれさんぢうがうちふれめ〜さき工を

四十二

ある。これ父の名とめつてさきうりうりさんぢうこれをうけまぶるは

四十三

の〜んおのまが名とめつてさき〜んとせさんぢうはさるちこまを

四十四

うけまぶるとんとせ。さんぢうあひ〜がひふうやまをるとうけていまだ

四十五

よりのこのうやまひとめとあがるのハあよよくえんせんや。これさん

四十六

ぢうと父ようつ〜さんとせるとわめゆ〜とるれさんぢうとうつ〜

よきこのよきまのつづし

第五卷

十五

まゐるのへまゐるをちるんぢふぐこのかきころのもせなり。るんぢふもせを
まんぜばかりふば日れをまんトけいーかま日れをゆびじてかきより。
かま^{四十七}ぐくきころをまんぜぐるさき入りうふまで日か正をまんせんや。

第一章

そののち及そのがやくのうまを日こり^{一節}あふまをちてべまやの
うまなり。あひひるるむらがりかのかんのびやうまのうへ小あつてま
さころのてじこ正を^二あてまをちこまよまごがふ。及そ^三やまふのあり
てかまよてー^五まとまのまごあふ。まきふよこまのまきまへの
せうくちうかる。及そ^五目をあげてあひひるるむらがりあまよつくを
あてひまひいよひてりひあまをく日れらひぐくよりのちをうあてま
まふをー^六あや。めまよりあまをまんとまををりてまかまを
ころちまごまよまこれまひあふ。ひまひいぐりまをく二十のめめめ

これらぐあひのくまごーまをまもまごまだ。てーのーま

又ふたしむるや。のそよりあをうんととせるとありそふかまを
そろむぐふあふこれそひあふ。ひまひいぐひたぐ二十のんぬのめち

これぐかひくはと一まをまもまふふだ。で一のハチん
ひま一まのんべろろぐまやうふひのんでまやがひたぐ。そふどうトあか
むぎのめちあつてままきうを二つとふふふ一のりまふれどもこれだ
あまきのんよるんのようにふらや。及そのひあふそそのんをふせ
めちそのまろハんまふむ一のりまはるんうだふのふあチ。及そ
のちをとりてのたへてで一はひのふで一もまふまはるのふ
あふうをもまふまうりあひくはふふだ。はふふのくまふま及そ
で一あひあそひあふそそのあまりのふひとひうひてあふまはるふ
とふれ。つひふのろくふふまろのあかむぎのめちをのまり
ふひとひうひて十二かふふら。
そのん及そるはまろのてんト一をふてのたぐこれまふかかせ

すそしりすろふのむづし

第十言

十ノ

うのよるふばさくふんといひ一のり。及そかきふがまたりてまへ
 ておのよしととりてつしとるんととるをとりてまへさりてひとりやまふ
 ゆきあふ。^{十六}ゆひりのあひて一まかへたよゆきそ。^{十七}ふね又のわりうまふ
 じりてかぢおかん又のぞかまぎふぬれ及そりまびさくふば。かせ^{十八}
 かわち又ふくよよとておまのがる。^{十九}て一まふふのぐ七八をよとまゆ
 のち及そうまふゆんでふね又ちうよるとおそまうまそおそる。及そ^{二十}
 のいひあふなくこれりりおそるく一とるゆ。^{二十一}かきふつゆふようこんでこれを
 うけまドむりてふね又のける。ふへちちまらばぞかちうゆのまへよあり。^{二十二}
 三十二
 まやうあちうそのか一このまう又ちのまて一まもののわらひとらの
 ちう又ハダのこぢねう一及そもて一とともよとぢね又のわらびま一
 て一まのまひとりゆきまををる。^{二十三}まうまもまづりこぢねまものあて

てまやまをたち及そのりかま一てのちくゆちをくらふのまところ

わろよハズのとぢねうー及そもてーとともよとぢねよのぢぢぢのまー
てーぞのそひとりゆきゝるをえる。^{二十三} ちよももづらうとぢねとものちて

てべとやとるんち及そのりぐゝぐゝしてのろく、のちとんらふのそとろ

よちろづくのちろゝよりまゝる。^{三十四} のろく、及そもてーととももかぢよ

ゆるエとをえだかれともふねよのぢりてくべおぢんよのこりて及そと

ゝぢね。^{三十五} うそのかーこのとらうりてはよのよとまよひたぐらびとんま

そふのこりぢぢひゝるや。^{三十六} 及そのひひぢぢとくこれまことちよよるんぢと

よつげんなんぢぢぢれをたぢねるハてんドとエとをえゝるゆあよのぢぢ

ゝぢぢのちとんふてちちちちてめくまぢよゝゝるゆあのと。^{三十七} やぢるま

のかてのゝあよらうとるエとなうれいまーかぢりるまりのちよよこのち

ぢよぶのかてのゝあよせよまぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

とまるののちりけーぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

のろく^{三十八}のりまゝくぢれぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

寺六堂 一七

二十九

及そのいひあはれなくかまぐつらたしなるものをえんむるとはるなりこそ
神のまじとせ。^{三十}いづくあるべからんめづるきあやとあたるふてこれら

にてあることをえんむるやあるべからんのことごとくはるや。^{三十一}むぐりこれらぐせん

をぞものれち又あつてまにかとくらふ種よいなゆる天よりのちをのこ

てかまじよんらたしなり。^{三十二}及そのいひあはれなくこれまじとあつよんちと

又つげんもせかの天よりのちをえんちよのふ。^{三十三}よつて神のちとハひま

よりのまじとのちをえんちよのふ。^{三十三}よつて神のちとハひま

天よんちとあつてせけんよのちをのふのち。^{三十四}まじよ

まじはね又いのちをこれよのふ。^{三十五}

及そのいひあはれなくこれまじとあつちのちのち。^{三十六}これよはくのふ

いふもあはれこれまじとあつちのちのち。^{三十六}これよはくのふ

いふもあはれこれまじとあつちのちのち。^{三十六}これよはくのふ

いふもあはれこれまじとあつちのちのち。^{三十六}これよはくのふ

これよりこそをあるよりふえてこれ天より念るといふや。及そのいふ
物よりこそやきそゝとかなれ。 四十四 己を一つを後の父こそをひくぞれが

これよりこれ又はくこのことばはくこのへこれ此多の日又こそを
かこさんとせ。 四十五 こそあるものごものかきまじよいたく神よりかあられん

とせゆふかよを父とまきてあらうあてまるぶのへこれ又つく。 四十六 まうぶ

たすも天父とよなるものより神よりのものにて天父とよなり。

四十七 これもとあつ又るんぢとつげんこれをえんむるのへかぎりるま

いのちあり。 四十八 これいのちのめちあり。 四十九 ろんぢとげせんをさもあれちよあ

てまんかをとらあてつあふまふあーなり。 五十 へくあてまううあてあー

ざるのへ天より念るのめちあり。 五十一 これ天より念るのいきるのめち

あり。 五十二 ろこそをへんかかぎりるまよいきるこれのまんとむるのめち

はあをちとがあくせけんのいのちをあるがよめよあううあてはせてん

とせむののなり。

ざるの穴天よりなるのゆりあり。これ天よりなるのいきるゆりあり。人こそをくふ穴かぎりなきよいきるこれのくんととむるのゆり

とむるものなり。
とむるものなり。

五十二

よこどもあふそひていたくこまじぐんをよくそのあくとんをいむるや。及そのいひあふたぐこれまをさうよらんぢうよつげんらんぢうふん

五十三

げんのむせこの血をのまげんばとむるらんぢうぐうちよりのちあり。

五十四

コガあくそくらひコガ血をのむのハかぎりなきいのちをありコガも

五十五

まへとむるの目こそをかせんとす。コガあくハまこふらひののコガ

五十六

血ハまこふのこのの。コガあくそくらひコガ血をのむのハかぎこれよ

五十七

とむるこれもかぎよとむる。いきるのちくこまをばうてこれもちくよよう

五十八

てあうちあていきるグエくこれをくふゆのもまへこれよよてあうち

五十九

あていきる。こまじまうその天よりなるのゆり。らんぢうぐせんぞの

よここのよここバのむらじ

第六卷

十九

これおのれとうふんとせむののこをせとのとよりありあはひなりまこ
ひひあはしくかるがゆ多又これあんぢらよひひなり日が又よりこまへ

らるよふむんバこれも日れ又くこまへ。こまよりていどもあわく

六十七

さりてかのおんとまよまこゆなだ。及そかの十二のていよひあて

六十八

ひひあはしくあんぢらもまへさふんとあつせらる。まゆんべてろひたく

六十九

ままかぎりまきひのちのこをあり日れとまへこれ又ゆんや。日れと

七十

又あるへんれまといきる神のむせと△をとんドる。及そひひ

あはしくあんぢら十二ののの日がまふぶとまのののよふなだや

七十一

あはしくあんぢらうちのいちんあはるり。及そこまをいかにせぬん

がむせとよふせいあうまう十二てーのいちんまへあのをまをうふん

とせむののをゆびぎぎあはる。

一節

第七章 そののち及そハガマくよのあてゆくよこちくこまゆきあはる。

よこどもかのあんとまろさんとせむよよあてあり。よこどもまのま

なるのせらちるよる。及^三そのまぢうどいりくこれよりさりてよてや
 又ゆきてて一ぢも又んぢのむらとらうとんせしめて。り^四まどめふふ
 るれんとわつしてまううまてそのるは^一かくれ又むらめ^二のハめ^三
 んぢるぬとらうのむきハ^四むのむをせん又め^五るせよ。け^五一^六まぢう
 じいもるかりま^七め^八のわ^九くと^{一〇}んせ^{一一}だ。及^{一二}そのりひ^{一三}ぬ^{一四}た^{一五}く^{一六}んぢ^{一七}ら^{一八}が
 さまはね^{一九}又ひ^{二〇}ゆ^{二一}こ^{二二}が^{二三}さま^{二四}り^{二五}ま^{二六}ぢ^{二七}ま^{二八}ぢ^{二九}だ。せ^{三〇}けん^{三一}よ^{三二}く^{三三}んぢ^{三四}ら^{三五}を
 ま^{三六}ん^{三七}だ^{三八}る^{三九}て^{四〇}ま^{四一}う^{四二}ま^{四三}て^{四四}これ^{四五}を^{四六}ま^{四七}ぢ^{四八}ふ^{四九}。これ^{五〇}その^{五一}ま^{五二}う^{五三}の^{五四}め^{五五}き^{五六}こ^{五七}を^{五八}
 る^{五九}や^{六〇}う^{六一}こ^{六二}む^{六三}ら^{六四}又^{六五}よ^{六六}う^{六七}て^{六八}り^{六九}。ん^{七〇}ぢ^{七一}ら^{七二}この^{七三}せ^{七四}う^{七五}を^{七六}ま^{七七}め^{七八}ら^{七九}又^{八〇}ゆ^{八一}け^{八二}よ^{八三}これ^{八四}ハ
 の^{八五}ま^{八六}ぢ^{八七}ゆ^{八八}ら^{八九}ば^{九〇}こ^{九一}が^{九二}さま^{九三}り^{九四}ま^{九五}ぢ^{九六}ま^{九七}ぢ^{九八}ら^{九九}ま^{一〇〇}ん^{一〇一}ぢ^{一〇二}ら^{一〇三}の^{一〇四}よ^{一〇五}う^{一〇六}て^{一〇七}なり。
 及^{一〇八}その^{一〇九}ひ^{一一〇}を^{一一一}たり^{一一二}て^{一一三}る^{一一四}か^{一一五}が^{一一六}ま^{一一七}く^{一一八}又^{一一九}さ^{一二〇}ま^{一二一}る^{一二二}。ま^{一二三}ぢ^{一二四}う^{一二五}ど^{一二六}い^{一二七}ゆ^{一二八}く^{一二九}の^{一三〇}ち^{一三一}及^{一三二}そ
 も^{一三三}せ^{一三四}ら^{一三五}を^{一三六}ま^{一三七}め^{一三八}ら^{一三九}又^{一四〇}ゆ^{一四一}きて^{一四二}め^{一四三}ふ^{一四四}ふ^{一四五}せ^{一四六}だ^{一四七}ま^{一四八}て^{一四九}ま^{一五〇}う^{一五一}ま^{一五二}て^{一五三}か^{一五四}く^{一五五}ま^{一五六}よ^{一五七}り^{一五八}ぬ^{一五九}。

よ^{一六〇}こ^{一六一}ま^{一六二}せ^{一六三}ら^{一六四}の^{一六五}う^{一六六}ぎ^{一六七}り^{一六八}小^{一六九}及^{一七〇}そ^{一七一}を^{一七二}こ^{一七三}づ^{一七四}ね^{一七五}て^{一七六}り^{一七七}く^{一七八}か^{一七九}ま^{一八〇}り^{一八一}ぐ^{一八二}く^{一八三}あ^{一八四}う^{一八五}あ^{一八六}る。

あそひひをたりてるわくやくよきまる　まぢうよひのくものぢあそ
もせらとまのるよゆきてあふふせばあそまうあそかきよーあふ。

よこどもせらのうきり小あそととぐねてりくかまのぐくあうあ。

十二　あそよはきてさやくとあわよきんとあまのりあうあひまー

のろく　とまをたはののといふあり。あうれどもよこどもとあそれて

これあふふふそのとをいへば。

十四　あそせううきりのうちあそてらあのかりてあまへとなくあふ。よこ

どもものあうことあやーまていなくはくのまてまをたはあうよつてかく

とある。あそひひあそく日があまへああよりよあふはのほこれと

はらのまののよりあり。人のあうこのあねあふふたんとわつせば

かろふはあまへあふはあよりーあふは日がああよりあ

とある。ああは日あよりあるののへああは日あよりあ

ああは日あよりあるののへあこれあああ

よこせらのよあをたはあ

第七章

二十一

申そのうちよもふぎの工^ナなり。もせのよらんぢとよ申うわを
 さげふばやらんぢと一十人もこれをまのふだ。よよそれを日れを
 ころさんとわのふや。ゆ^{三十一}のゆ^{三十一}らんぢわゆくわさるく^{三十一}らんぢ
 ぢところさんとわのふや。よそのゆひ^{三十一}ゆた^{三十一}く日れひとらの工をわとるふ
 てかんぢと^{三十二}まのやまか。それもせらんぢと小かんをさるれのをさげけ
 たりまらむもそのわへもせよりまるとわのふだのま^{三十三}せんをともより
 申へよかんぢといふ日又わてんとさるれへま。人のいふ日又
 わてさるれのをうけてもせが申うわよそむくよのぶるくまらふばまるとら
 のいふ日小人と工とく^{三十四}るわま工へらんぢと日れ又ゆる^{三十四}べきよや。
 わうのか^{三十五}ちとめつてた^{三十五}工^{三十五}なる^{三十五}ゆ^{三十五}は^{三十五}ま^{三十五}ぎ^{三十五}とめつてせと。
 よる^{三十五}されんのう^{三十五}ばの^{三十五}ん^{三十五}く^{三十五}りて^{三十五}いた^{三十五}く^{三十五}て^{三十五}ま^{三十五}んの^{三十五}ころ^{三十五}さんと^{三十五}わ^{三十五}ら^{三十五}ま^{三十五}ると^{三十五}ころ

ののよあふばや。^{三十六}のまかまのふまよののゆひ^{三十六}われまかまよ^{三十六}まよ^{三十六}

ふじせはまもこののわらふかおのてさやくとかくのてくはるとま
 てはるちまわりつうこのかいらまともよやくめんをやまての
 わらふとせらんとま。^{三十三} 及そののりくりまをふく日れらんぢふとのふ
 のらふ日れをはらえはののふくる。^{三十四} ろんぢらまふ日まをくづねれども
 のたは日グせるところよらんぢらまくるとのたは。よへどもたぐひ
 はそてりくかまままよりぐくよりゆきてまううて日れらうま
 めたざらんや。のよへ日れよまんぢせとのよつきてまううてへ日ねの
 んとあまんとわらむるや。^{三十六} かまグいたゆる日れをくづねまども
 のたは日グせるところよりまくるとのたはるハこまらんのりひをや。
^{三十七} せんのまをむるちわらひる日及そらてよをへてりひ
 んかじら日れよつきてのかぞ。^{三十八} 日れをまんぢるのハそのむらより

うらふばりきるまがるまくるとくらのてりかきまるとよのけるとせり
^{三十九}

六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十

よとひてのたぐらんぢをかまをひきまごいごらんや。四十六 やくゆんども

のたぐんのまごは人のいごよののいごだ。四十七 ふじまごものるんぢよ

もまごまごまごたれごらう。四十八 つうごりごもふごまごごものうちかまをまごる

めのあらう。四十九 まごのまごつらうとまごるたまごまごいごひのろるく。五十 かまよ

がうち一けんかのむろゝゑるのとき及そよはくのふこでもかまよ

よいあていたく。五十一 まごばあてそのまごところをまごるまごふじれどがま

わうあよんとまごさんや。五十二 いたくなんぢもまごがまよよりうさるれかん

がまよささるるめのがまよよりあたるとす。五十三 あのくいまいへよ

うる。

第八章

及そむわりやまふゆきて。五十四 ちやあさてよよかりあひてたまご

とまよつく。及そまごしてまごうまごあまゆ。五十五 かんあひんらんをまごるあて

んよかまあたるとあり。かくまふふじまごもまごをひきてそまよ

第八章

及そむわりやまふゆきて。むやのさてよよかり強ひてたえまふ
こまよつく。及そぶしてまううまておまゆ。かんおらんをむこまふて

んよかむらるゝあり。かくまふこまふこまふをひきてそ及よ
はうめめろくのうふおきてりなくせんせへかんおらんはる
うらかむられより。かん^五おかくのいよくはるゝのまふもせぐ初めの
さとりりいあてうちころるべらんぢらあをひふそや。かむ^六これと
いあて及そところるゝてうつくせんとわつて及そ及そをまげてゆび
あてつらふくく。かむ^七ちやまばあてとあよよつて及そおきてひひ強たなく
るんぢらぐうちのはるるまののりちむんぬよりいあてこれをうつて
かり。ま^八よをまげてはちよかく。こま^九をまぐののまおのまぐ
ころよせむふれてあよよりあとうとよいなるまをりちあんくまかりで
さりてひとり及そとのちりかんもまふよふ。及そ^十及そをわてて
かんるのわらよまふも及ぼしてこれよいあてひひ強たなくかんおらんぢを

よんしのちのこまのまふ

第八章

二十四

ぢぢぢもより日れハ人よりるんぢぢハせけんより日れハハせけん
 よりせぢ。日れくぢぢゆへるんぢぢかぢぢるんぢぢがつぢぢうちぢぢせん
 とひぢぢりけぢぢるんぢぢ日が日れる工をぢぢぢんバるんぢぢつぢ
 うち又ぢぢせん工くるんぢぢせり。ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢ日れぢぢぢよりひぢぢるハぢぢぢぢ。日れるんぢぢとせぢぢぢぢ
 とぢぢるぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢよりぢぢぢぢのハ世又はぢぢ。ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 工をぢぢぢ。及そのひぢぢぢぢるんぢぢぢんぢんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢ日が日れより日がぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢよりひ工をぢぢ。日れとつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 のぢぢぢぢぢぢぢ日れはぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

及その工をひぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 三十一

とよりよみエとある。日とつらたはの日はととのにま父日れっ入り
のこーとらげけー日れはね又のわうこのようぶとらとわとら。

及そこまをいひぬふとさ人わわくこまをえんば。ひまーよこまの

うわのえんむるののよいかていひぬたぐらんぢら日グミちをはね又

たれバまてと日グでーより。かんぢらとこまをえんんとままてハ

かあぐばなんぢらとゆるーとせん。まかりたぐ日れらわべらおんのえそん

めとよりいまだ人のやととらぐらんを日れらゆるーとされんと

いふや。及そのいひぬたぐ日れまてとら又らんぢら又はげんはまを

わらまのへつこのやと。それやとへえへくり人よとままらばとむせと

えへくままる。むせとらんぢらとゆるーとせバとらまてとゆるー

とらん。日れるんぢらわべらおんのえそんなるエとある。たぐ日グエとら

らんぢらとぐうらよむるまてとらまのゆへ又なんぢら日とてとらとんと

わら。日れ日グ父又わてえんまてとらへとらとらこまをいふらんぢら

二一六

さんぢとが父小おはしてゐるさう入申さちこれをわとあひ。三十九

のべらもんハ日がちくあり。及そのいひあつなくさんぢとめいあべらもん

の子とまゝうぶうらばあべらもんのおとあひをわとあひん。いひ^{四十}日れれ

よりまゝくさうのまをさんぢとよはくふのふりさんぢとかへて

日れをさうさんとあつ申さち入申あべらもんのおとあひあふだ。さんぢと^{四十一}

ひとりりりさんぢとがちくのまをわとあひのま。まかひなく日れと

いんらんよりあてあうあてうあれるよあふだ日れとひとりのちくあり

申さちれあり。及そのいひあつなくれさんぢとが父とまをわとあひ

うらふだ日れとめいあべらもんのおとあひのまをわとあひん。いひ^{四十二}日れれ

てあうあてあひる小あふだいしりのあうと日れをはうたふり。さん^{四十三}

ぢと日がめいあべらもんをわとあひのまをわとあひのまをわとあひ

あふあふあふあふなり。さんぢといふるとさうのちくハあふりさんぢと

のわらうをさるばるこれのわらうをさるゆゑこれのわらうをさるばる

としをさるなりしづらうはしるんぢとてくさるんしこれのわらうを

ありてさううまてそのしをとりとまめる。日が日るんぢとせんをあらん

ぢくこれをえんとわらうしりえんるときハはあなりこのまあり。

五十七

よしどめのしなくるんぢとしままめするんぢあよのぶらんとえんる

五十八

や。及そのしひあそくこれまてさるよるんぢとつげんりままめぶらんと

五十九

とさるさきとれしまま。まゐりしととりてあのか人をさるげうんと

をたぐ及そのろくさう又かりゆきててらよりいでさううまて

さうりあふ。

一節

第九章 及そゆきさうりあふのときうまれてよりめくさるものをえんる。

てしどもとひていたくしあやうは人うままてさううまてめくさる

とせこれかつまをや。あつこよよるう父母よよるう。及そのしひあそく

かきぐはまよも父母のはまよもあはばひとり又うまぐう人小あそ神
 のまごがぬとされるがこあがり。ひる^四せるとまき日れくるは日れをつら
 のくまごごをるはあさくつてまあたらこれもよくなるはとす。
^五日れ世よのまはあひび日れまあたら世のひかりを。ひび^六をたりては
 つなきてはまきをめつてとらとこれてめく人月又ねりつて。
^七こま小うこりてゆきてはろあひけよあらんよといひあふ。その人ゆきて
 あらふてくるとき八月あきくうり。まろあといふううてりまあるをち
 はくたまさく。

^八とりの人とのめとこりそのめくするをまのれまもといをくこれ
 してまうあそよめのよあはばや。まう^九りといふもありくこちくまよ
 あこりといふもあり。あまあたら日れをといふ。^十まかゲいをくま

ぢが目いふあそあきくうりくるや。こま^{十一}ていをくまそとるまぐの

あつりといふものり。むのまはあなち日れそといふ。ミかグのなぐらん

ぢぐ目いろふあそあきしううりなるや。こゝ入てりなくあそとるぐくの
人わりとらとされて日ぐ目又わつてゆきてはらあのはけよあの人よと
りひつかり日まはあなちゆきてあらあて見る工とをくり。ミかぐりなく
その人いづくふうあをいなくあふだ。

ミかかのむろーめんぶのののをひきてふ日まはとも小せがきーり。それ^{十四}

あそとらとされてかまぐ目とひひきあひくるへりとも日あり。ふ日まは^{十五}

あものともいろふあそ見る工とをくや。いなくあのか人ごうとめつて日ぐ^{十六}

目又わつつけて日れあらあてあううあそ見る。ふ日まはあものうちけ

人りとも日とまゆふばあそ狝より小あふだといふものりべうよまこはま

人りいづくあぞよくこのあざのてんあこ工とをくやといふものり。そま

ゆへまあひあそあうり。めんろ人よまこいなくあふあらんぢぐ目

... 二一六

とひふきこりるんぢかれをいうる人とおめや。ひやくさきあるのを。

十八

よこどもをれめんとよめてゐる工をよめるをんせげをれ父母をよびて

十九

とひていたくゝるんぢとむせとあつてうまをてあううあてめんとと

二十

いふは人よあふばやいまのうふあてゐる工をよめるや。父母のいたく

二十一

これにがむせとうまれてあうあてめんとと工をよれこれをある。いま

いうふあてゐる工をよるハこれあふばとれをれ目とひふきこるハこれ

二十二

まよあふば。かきおをかかりかきよとひてあづといたあかべ。父母

とをよいふはげとよこどもをかてる。よこどもあつそあそとくれと

ととるととあふものハうあふばとをよりのひをよりあひいふばとやく

二十三

そくあふるよよとてあり。かかぐゆふ又父母かきおをかかりこれ又

あふべとあふ。

...

...

...

...

二十四

ふいせあままてあうめんととるものをよびてひやくさつりをれよ

二十五

...

そくまゝなるよふてあり かるがゆゑ又父母かまわをかなりこれ又
まよべーといふ。

二十四

ふにせまどもまごぢうーめんとするものをよびていひくさうりを能く
くせよとこれと人つとびとをある。いひくつとびとをやるや
これとびぢぢうーめんとするのいふるへこれとをよとこれある。まごといひて
いひくかまゝとぢぢうもをのそとるやいふ又まてなんぢが目をいひく
とるや。いひく^{二十七}これとまごといふと小はげなりとぢぢとさうばると
まごたびさうんとつとるやのよるともあはか人のでーとるん
とつとるや。^{二十八}まかこれをあまざりていひくなんぢがまごでーとる
とれとハもせのてーなり。能のせよまごはりハゴがあるところ
ありまごこれとびぢくよりとるをまご。いひくあはか人ゴを
いひきてなんぢとあはか人のいひくよりとるをまごとるハまごといふ
かあはかや。^{三十一}それまごとゴこれをある能ハつとびとをさうばと能と

よむるのよむるよむる

第九卷

三十

三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一

とていへてそのむね又くぶののへはさるちこれをまへ。三十二

へよりこのうこうまれてめんとるのの目人よとてをひぶく正を

ひまきうは。三十三
三人律よりよむぶされよとまるとなり。三十四

るんぢとくつとるうふうまれよりうつてられとてあゆるや。つひ又

これをあひりだん。三十五

及そそのかたるくとまてこれ又あてりひあたるくるとんぢ律のむまを

あんぢるう。三十六
ひつくとまののわうとこれぞやこれをあてのわうとをん

ぢめく。三十七
及そのひひあたるくるとんぢとまてこれをえよりとんぢ又

のひよのへとまなり。三十八
ひたくとまこれとんぢ。つあよののわうとをん

也。三十九
及そのひひあたるくるとんぢとまてこれをえよりとんぢ又

とあてえせしめあたるのわうとてめんととるるがゆへなり。四十

よとるふにせはまはてをまてのひとられちもまめんとる。四十一

及そきこのひびきなくされまことおろよんぢらよつぐんさればまゐるち
 ひたの戸八されよさきよまそりくるものどもハねまびとるひ
 むぎさりひつどかまらとまきうだ九。これハまゐるち戸さりこれよりい
 のハまゐるれんとそりせりひひのそる。ねまびとまきうりてめつた
 ねまきころーわろなはぐまのまこれまきうりてひつどとまそりち
 と及ーかろさるんふまか十一。これハひまーよまかひびとよまかひびとハ
 ひたのたぢよのちとまそる。やどひびとひつどのうひびとよまふだ
 ひつどハおのまぐひつどよあふざるめのハおわらまのそとこてひつ
 どとのとーおきてあがるおわらまハまゐるちそのひたどとほろんで
 まらうまそむらりさんむ十三。やどひびとあがるハそのやどひびとより
 ひつどとよりあがる小よそり十四。これひまーよまかひびとヒダひつど

とありてひつどあもまらる十五。父のされをまきこれもまへ父とまらる十六

あうまをむらりさんむ やどひびとあなるハそのやどひびとより
ひつとをくりかざる小よつてあり。 ^{十四} 己れいまよきかひびとロダひつと

とありてひつとあもあふる。 ^{十五} 父の己れをあり己れもまへ父とあるが

いづくかう己れひつとのあよのちとまてる。 ^{十六} 己れまへづつひつとあり

はひつとをよりよめざるものこまをも己れうるふばたばまへてロダ

とあよまうめてむらがりからかひびと一人り小るべ。 ^{十七} 父己れを

あのまへハ己れのちとまてくあうあてまへいきるとめつてあり。 ^{十八} ロダ

のち人ようをさるよめば己れ刃ばうとこれをまてる己れよくこまを

まてる己れよくこまをまてまへよくこれをさるこれロダ父よりうけるの

むねあり。 ^{十九}

よこまもこまをまてあひのふをよあり。 ^{二十} ああかくかれあまかうされてむける

るんをこまをまてくこまをせんやといふあり。 ^{二十一} ぞうよかれあまかうさるくの

こまよめばあまよよくめらうのこまの目とめけんやといふあり。

ふゆれさき^{三十二} 及るされんよあつてをかざるのせつ々又及せていよあつて
 てそろのんのん^{三十四} 及ゆきあひこり。よごもあれあうこをうこまて
 うこりていなく^{三十五} さんぢいれととあてうごふたゝ。むる^{三十六} 一のりまでぞや
 さんぢいれととるふのきふう又いれと小つげよ。及そのいひあうとく
 日れまごよ^{三十七} さんぢうはげりりさんぢうせんせ日れ父の名とこのま
 てまらあごさハ日が^{三十八} 又あやうこまげ。さんぢう日がひつド小あふげ
 こくとゆめて^{三十九} せんせ日がひひるをとり。日がひつド日がこ多をまく日れ
 こまをありてあううあてひつド日れとあごふ。日れかま又かきりさま
 のちをたまふ^{四十} かつもあうらばまこよくこれを日がまよりうあふのの
 あり。父^{四十一} 日れ又こまととこまふのハよろづよりあひひりよく
 これを日が父のまよりうあふのれあり。日れと父とひとつこり。

よごもいりととりてあれあうことうんとあつた。及そのいひあうとく

す。父これこそまよとよまよの父よるよりわひまりよ
これを日か父のまよりうをよめれす。これと父とひとつり。

三十一

三十二

よこどもゆいととりておれわうととうんとわんせ。及そのいひあはれ
日れ父よりきてよきかこあひわあきとめつてるんぢとよあやとり

るんぢとりがまのわこあひのゆへよりあて日れをうんとせむや。

三十三

よこどものいたく日れとりあててるんぢをうへよきかこあひのゆへ

よあふだこあふだのわくごんせむゆへのまるんぢ人ごるとまき入あひのま

三十四

か非といふ。及そのいひあはれるんぢとがまつらうよ日れるんぢとを非

三十五

ととあふといひばや。かう種やぶるべうだ。ゆい非の工こりあふぶ

三十六

のへ非ととあふいたんや父の御ととてせんよはうたごるめれ

あひまを非のむせとといふ又はつてあふだのわくごんせむといひや。

三十七

これ父のまよをせむれ日れをえんせむととつれ。ゆいこれこまを

三十八

せむ日れをえんせむいへども日かまよをえんせむのつて父日かまよ日れも

...

...

三十一二

とのぶのれそれきやうふらさうやまひりり ぬかぬいもうと
人とやうてあそよつきていたくたうかかあこののいまところのれ

やまひりり。及そこれをきくていひぬたぐはやまひりりまのふらば
いま一れのさりのまれのむまこまをのつてさりりかやうこ
めらるゆへり。

五 それすれといもうとくらぶろとまか及そののいまるところのれ。

六 それやまひりる工をきくぬたぐまところ又あつて二の目とさきり

てのちよで一まもよくりりていひぬたぐこれとまもよまへよてや

ゆけよ。で一まものいたくま子これのひぶよまもあまをり一あて

うさんとあまのあまかきままゆきぬたぐや。及そのいひぬたぐひる

六のときふのふばや。人ひるゆきてはまぶらばようてはせうへのひりり

とる。あまゆきてうあふばはまぶくそれうち小ひりりまきよよら

てりり。

小石ある正六の六正よこさのわやくまはことまをやとよ
つきてそけまやうぶのよめよこれといひるべし。まはあハ及その

いこり^{二十一} びんかをまぐていごくのれわうこをむらふ。まをやハいへよざだ。

まはあハ及そよいそてのたぐまのこよとり^{二十二} びんかまやう

びんかあふびんせだ。あうれども^{二十三} 日れあるあふ^{二十四} 非又るはものである

いのはが非くあふびんあふよ。あそのいひ^{二十五} びんかあふるんぢがまやう

いふくあふびんあふいきる。まはあ^{二十六} ぐいなく日れあるまあれ日いきぐへよ

かまもくあふびんあふいきる。あそのいひ^{二十七} びんかあふるんぢいきる。いきてあうら

るり。これをあんむるのハあまといへどもくあふびんいきる。いきてあうら

あて日れをあんむるのハいづもあせだ。あんぢ^{二十八} ぐいをあんむるや。

いなくままあうり日れあふるれまを^{二十九} 非のむせこりせらんよんぢい

といひくるのよあんむる。

いひをたりてうらさうていそうよいもうとまをやとよびていなくあ

あまのあふびんあふいきる。まはあぐいなく日れあるまあれ日いきぐへよ

えやうのいりてらんぢとよびあふ。まてやこれをきくてまゝやうよむきて

三十

二十九

及そよはく。及そのまじむらよひらばるるまはあのかかりよのひ

三十一

なるところよとる。よこどもいへよまてやといひるまじかめのへかきけ

まゝやうよむきてのゆるとるまきへこれをかりていなくかきはらふ

三十二

ゆきてるくのま。まてやへ及そのところよいりてこれをとるまきへ

のいのすへようのぶいていなくまきこよとりあひさるるまきやう

いふうらむらむせだ。

三十三

及そむんるれとてとてすこかれとともよまくるのよこむりれとくと

三十四

とるまきへゆよまきさうとてうねひるまきあひき。いひあはるるんの

三十五

ところよわうかりとるや。いなくまきまよりアてまへ。及そかきあふ。

三十六

三十七

よこどもをいなくかきけ人のいさるるまあまじきかか。まこいあも

ありかきめんとりの目とひくくハあまけ人とてあざうりむる

三十八

よこごものしなくかきけ人のいさるこをあたじきかか。すこいあも
三十六

のりかきめとよのの目とひくくハのよけ人をとそ取ざりし切る

ここのたごんや。取そすのゆよりれひなきてはうよりのりあふ。
三十八

はういましやう。うへよりく。取そのひあをくしとうせよ。
三十九

取しるのくおんあなやうままありつゝまこりまままよはら
四十一

田かたねをこ。取そのひあをくこれおんぢもんぢが神のさうり
四十二

とをるべしといひたる小あふばや。つあよりしとわうあをさうり
四十三

うはは。取そ月とあびていひあをく父のまごよこれをまぐハこれ
四十四

あふささあよりのけ。これあふささあをつねよこれをまぐあふこを
四十五

あふさこれをいあてめがうさうのをとそあふさあこれをはうを
四十六

こをとあんせんあむ。いひとさうりてこをさこあてよびてらざろいだよ
四十七

といひあふ。取しるのまあをちりぐまなるまあかりもかり
四十八

三十一 三十一 三十一

のねれゆてをなふきわめてハさぎゆてはくまる。及そのいひをなかくこれを
さきてゆりゆ。

四十五

よこどもまてやにつくのハ及その奇しきふところとておわく
のねれあをえんむ。 四十六

ふこまてども小つがるのねれもあり。 四十七 せれうへきつりはうさのうまると

ふこまてどもとめりまりてきんをえてゆくと人おわくとんども

正をさげハにれりゆんとせん。 四十八 めいかくのいづくゆるしむるまか

くさるばかまをえんむろ白人のたりて日があくことなまこと

うなゆんとせ。

四十九

その一チ人ン名ハクやふこかれ年おかきつりはうさたりゆらく又
ゆあていなくるんぢうるたもあふばきさ一ち人ンたまよさりてお

五十

一てあふゆんのわろぶ正をまねかふああるハにれり小こまりて正を

五十一

その一チ人ノ名ハクヤフ己カハ年ハケキマツリはうさたりめろくよ
いふていなくるんぢうるにもあふば五十一まこ一チ人ノたきよこりてあ

一てあふあんのわろぶ工をまねかふあむるハ口れと小こりこる工を

あめたは。五十一こまをいふあめよりいがるよあふばいま一そハ年ハケキマツリ

はうさこるによつてあらうめ又あそのまこま又かとりてあせん

とまるといふ。五十二まこはたきのまをたりアあふばたが神のさんむるの

子どもひとり又あめ一むるゲまあよもり。五十三これよりあてあうあて

のちのろく又あそころさん工をまらる。五十四あ又あそあふこよよあども

のうち又まこゆらばかのとろよりさりてあれち又ちあきのほくに

ゆきてひとむら名ハいひらりんよいこりてで一どもとまきあふ。

五十五よこどものまきこゆるのせちちろくあてかぎりのさきあわくの人

いあうよりあふされんよのびりてあめをまこあんとあつむる。五十六まか

あそとまねてたらよこりてあひくこりていなくかきせんとあめ

よまらうてーとものっ人々をさうとふんととるはめんがむら
よぶせいさうせういなくるんをやうややくとうりてうの三十まで

のりてまぐーきをむくたざるや。かまこまをりかまぐーきをうかりまの
小のふだひどり小のぶらうとめちてこまふまをらとねまあよよとて
るり。及そのいひぬをくをむくやまわけよめんらひかかうやくと
あさめあきてこがわうあむ田のようよそまへとり。けごーるんぢうまぐー
きののへつひにそをよりのこれへつひよそをたぬだ。

よごどもあわく及そのかま小をりぬふこをまりてむあたちまごる
及そのためのまよのふだひほあわうこあむるよりいきふだのらざろ
どもアんとわつせ。まつりはうまのうらごもまごらざろとごうさん
とむる。けごーよごどもあわくかまのゆへよゆきて及そとま
むる。

つご目たまあわくせうやとまのりよまごりて及そまごよ及るされん

よごのまのこまのまがし

第十一二章

三十一

あふエをまきてゆきてのれあうをむらふ。ふにエをまむのひくりにて

いとくさんぢとむるころをまなり。あま世ごぞりてこまよまへくふ
エをまむるや。

それ^{ニナ}せうのくぎり又ころまのむるよまむるものごものうちへまね

人のあそ^{二十一}ぐまくのべさいこのひまひい又つきてとひていとくせんせの

これと及そさまをえんとやうま。ひまひい^{二十二}ゆきてのんでまや又つげの

のんでまやとひまひいとゆて及そよはなる。及その^{二十三}ひひあそくめん

がんのむねこのさうりかぢあそくくのさきひりより。これ^{二十四}まとぢうよ

さんぢと小つげんむぎつづぐは又あちりていまむんちざるうちよ

つづぐのまんちるとまきハまあちあわくまをむねぶ。あ^{二十五}のまぐのちを

あひまののへうちてこれをうまあふあ^{二十六}のまぐのちをひせたんよ

あひてまふののへこれをぞんとてかぎりまきののちよあふを及。これ

三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六

又やくとるものハまさ又これ又ちがふべーコグとるところハコグやく
もまへかれ又ありこれ又やくとるものハ父ウあふばこれをうやまふ。

^{二十七}のまコグころコグふりるんそいよびさや父これをとらめてはさきより

まねかふー強べトヤ。これひとりこれグとの又はさきよりこりこり。

父いのあふれ 名とかがやうー強べ。天よりこゑのあつていらくこれ

まごよこまをかがやうーたり又これをかがやうせんとせ。^{二十九}うごよよとち

まぐのれごものいなくこれうまうりこゑさり。天のつらひあれあうこよ

のれいよとりよもあり。又そのいひ強をくはこゑコグとあふあふばるん

ちとグとののま。^{三十一}はせけんいまあつてとさるはせんんのままのまま

あつてあひいさる。これ地よりあがむさるくときハとるちめうく

とひきてあつてはうーか。又そこまをいあつてあふのあつとをゆつて

あつんととるこをまへーたり。

とひきておのまにはうゝか。及そこまをひかてまよのぬむるをゆそ

ぬせんとおる工をまゝしり。

^{三十四}まかグのむくこれとまやう又んままとおへく又ぞんむると

まぐのあふぬげんのむまかかむむだあげらるとりかへるんをや。それ

ぬげんのむまかへこれぞや。及そのひひぬむくひまをむくひり

るんぢらととも小ありひりあるときへむるたちゆけよんまこちまら

ひる工をぬる。んまきうゆくのへいぐんふゆくところをまむだ。

^{三十六}るかひりあるときへひりとまむせよめつてひりの子ままとる

べ。及そのひをたりてゆきてまうまそくひりぬふ。

^{三十七}ぬらぐまよゆそかくあむきむぎのてんト工をるぬふと

りまもるかぬあむまをまむだ。かくのむくまきあるいさやの

工がまゝしりてむくぬいひがつかへるあをばれこれか

いましつれをつらたまののどまんぢるましつれをやるのハつれをつら
ののどをやる。つれいまひつりつりせけん小まつりてつれをまんぢるののど

四十六

あてんふきよとまらざらしか。こが工ををまてあうあてまんぢる

四十七

のハつれつれをませせつれまつりてせけんよあつれいま

四十八

まんぢるまらけののど。あつれつれをまてくつれ言とうけざるのハ

つれをまらけののどつれをまらけつれまらけの工つりまらけつるまら

四十九

つれをまらけとま。つれかま小あてあうあてつれあつれいま

つれをつらたまの父つれまらけつれまらけつれまらけつれまらけ

五十

つれつり。つれものれかつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

第十三章

一節

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

又よ一をゆうとふんとせるとのつてせのんぐむせとよぶせいあうせう
 グころよれより。又そハ父の方のつとめつてせれまよあへて
 かつおのまぐれよりいづくれううる工をまりあふ。こま^四おのて
 あふくせるとをあせていあゆうとあせてまふれをのつてあてま^五がと
 かんよのせそでーのあーとあらふてあゆるところのまふれあてこせを
 ねふひあふ。せのん^六へてろよいこれバへてろぐいとくま^七に日があーと
 のらひあふ。又そのらひあふとく日があふとくをいまるんぢあふは
 のらこせをあるべ。へてろがらくあふ日があーとあらひあふハひう
 まぐもるはだ。又そのらひあふとく日れるんぢとあふたげんバるんぢ日れ
 よいらせんも日ける。せのん^九へてろがらくあーのまよあふはまも
 のこあもかあり。又そのらひあふとくあふそのぢあふのちたぐあふ

ういぐあーとあらふのまあうあてあまかまうあるんぢらひま^{十一}まよあ

よのちせんも日ける。そのへてろかひなくのミよあはれまも
のこもかかる。又そのいひあはれなく母をそのがむるのちたぐむ

うぐのーどのらふのミあうあて又ミかきよかさんぢうのまーまうか
るまじもめろくくよあはれ。けごー又そのませうのれたれぞと
あるゆへよめろくくさかきよまじとひあはれよ。

十二 是れ又でーまもののーどのいひあやうとまてまへごーていひあはれなく

これこれをむるへるんぢうこれをある。さんぢう^{十三}これとーあやうと

ねーといふさんぢういふあはれり。これまじよこれり。これなんぢう^{十四}

グねーとーあはれうとあてさかさんぢうグのーとあはれむあはれち

さんぢうのひまもよようくのーどのらふぞ。これさんぢう又まねん^{十五}

とくくさんぢうとあてこれ又まねあてさかまか。これまじとあつよ^{十六}

さんぢう又つげんもあをねーよりあわひるるよあはれつうたさるのれ

もまへはちたれめれよりあわひるるよあはれ。さんぢう^{十七}ひとをありて

... 第一三五 ... 四二二

これをうまげさへむひあり。^{十六} 日ぐりか入るちちめろくくとゆびぎばよ
のらば 日ぐりまぶさころのめ入 日れまをまると種 又これとま
又まろくまのめ入かををあげて 日れをけるとりか入うあふばまろ
ことある。^{十九} ひまみのひまむらむらうち。 日れさき入るちち小つげるひ
るふ入るちち日ぐり日れくるをまんぢで。^{二十} 日れまとまろよ入るちち
又つげん 日れはくまをまころのめをうけまじまぶまをちち 日れを
うけまじたる 日れをうけまじたるのめ入まらうち 日れをつまらめのめを
うけまじたるあり。

二十一

及そこまをひふさき入ころようれひ日ぐりかてめをてりひあまく
日れまとまろよ入るちち又つげん入るちちがうち一チ人 日れをうらん
とま。^{二十二} 一とまのひとま又入てこれをゆびぎしてまろひかとうかふ。

二十二

二十三

及そのめひまるところのてり一チ人 及そのめね又よりはける

又^{三十一}返る。

^{三十一}いづくのち又そのいひ返さなくいま人^{三十一}のむねとさうりかぐやうさまて
 非もかまをのめてさうりかぐやうさる。^{三十二}非ハうまをのめてさうりか
 やうさまをさるち非き^{三十二}のめきをのめてかまをさうりかぐやうて
 ちうちてま^{三十三}やう又かまをさかりかぐやうさんとま。^{三十三}日グ子どもいま
 ちんぐく日れるんぢととまの又ま^{三十四}るんぢとま^{三十四}日れを^{三十四}ぶねんとまれ
 ども日グゆくところ小るんぢとま^{三十五}くる工を^{三十五}ぶねむう^{三十五}よ^{三十五}ども小つげ
 ハ今ま^{三十六}なんぢら又はなる。^{三十六}日れの^{三十六}むき^{三十六}い^{三十六}めを^{三十六}のめてるんぢと
 又の^{三十七}ま^{三十七}あ^{三十七}のち^{三十七}なんぢとのひ^{三十七}とも^{三十七}小^{三十七}の^{三十七}せ^{三十七}と^{三十七}と^{三十七}り。^{三十七}日れるんぢとを
 の^{三十八}い^{三十八}なる^{三十八}グ^{三十八}い^{三十八}く^{三十八}るんぢとも^{三十八}又^{三十八}のひ^{三十八}とも^{三十八}小^{三十八}の^{三十八}せ^{三十八}と^{三十八}。^{三十八}るんぢとの
 のひ^{三十九}とも^{三十九}りの^{三十九}せ^{三十九}バ^{三十九}ま^{三十九}るんぢと日グて^{三十九}い^{三十九}なる^{三十九}と^{三十九}る。^{三十九}ま^{三十九}の^{三十九}ん^{三十九}へ^{三十九}て^{三十九}ろ

したく^{四十}な^{四十}ま^{四十}い^{四十}が^{四十}な^{四十}う^{四十}ゆ^{四十}き^{四十}返^{四十}ふ^{四十}。又そのいひ返さなく日グゆくところ
^{四十}

... 鏡十匹... 一四二四

まへをら一匹。日^四がゆくとさうるんぢとてまをををれまらまへてまを
ある。とま^五ま^五グ^五いたくま^五のあへのゆき^五ゆ^五ふとさうと日^六れらま^六ば
いたんやをれまらとや。及^六そのひ^六ゆ^六そく日^七れいま^七まらりすま
まりのちりり。日^七れより小^七あふ^七ばん^七ばま^七あ^七を^七ち^七父^七小^七つく^七と^七これ
る。る^七ぢ^七と日^八れとまりとま^八す^八日^八が父^八とある。今^八よりのちるんぢと
あ^八れ^八あ^八く^八とを^八る^八す^八あ^八れ^八あ^八く^八とを^八ん^八り。

ひ^九ま^九び^九の^九グ^九いたく^九ま^九父^九とめ^九て日^九れら^九ま^九あ^九せ^九が^九な^九れり。及^九その
ひ^九ゆ^九そく日^九れる^九ん^九ぢ^九とと^九め^九又^九ま^九る^九と^九か^九くの^九て^九く^九ひ^九ま^九ま^九
ひ^九ま^九び^九の^九る^九ん^九ぢ^九る^九か^九い^九ま^九ま^九日^九れとま^九ば^九や。日^九れを^九る^九の^九へ^九父^九とを^九る
る^九ん^九を^九父^九とめ^九て日^九れら^九又^九ま^九あ^九せ^九よ^九と^九り^九や。日^九れ父^九又^九いま^九父^九
日^九れ又^九いま^九父^九へ^九る^九ん^九ぢ^九る^九ん^九ぢ^九る^九や。日^九れる^九ん^九ぢ^九又^九いま^九父^九へ^九か^九す^九

あまてりあまゆふのまへ日^{十一}れ又^{十一}いま^{十一}父^{十一}を^{十一}れ日^{十一}を^{十一}あ^{十一}と^{十一}る^{十一}。日^{十一}れ

これよりまたハるんぢらんせざるや。これらんぢらんよりよめハ方すく

あまてのふふあふぢのまゝ。これよひまたの父を所 日ごをむとるふ。 ^{十一} 日れ

父小ひまた 日れ父よひまたハるんぢらんこれとらんせよあふぢまは

せるとらん日がむとるふ小よつて日れとらんせよ。 ^{十二} 日れまてむつよらん

ぢらんよつげんむとる日れとらんせよのハせあつらん日がむとるささろの

日ごかきもむとるまをせんときこれよりあひむるのれせらまへ

まさよこれをせんとき日れ父よつるをゆつてなり。 ^{十三} かんぢらん日が各

又るもたのかささろあふぢ日れうあふぢこれをきつて父をむとる

ゆつてささろかやういむ。 ^{十四} ゆへよらんぢらん日が各よつてこのか

あふぢかあふぢこれをむとる。

^{十五} ろんぢらん日れをのせば日がひまゝゆをまめれよ。 ^{十六} 日れむと父よ

とらん父うあふぢづよるさあわいとゆつてらんぢらん小たまふゆつ

昔の事... 卷一四章 四一五

のまっチ人ンのよぶば入及そ小のあてりたぐまのあをいれとよ

わふたしてせんん又わふたしてせんば入るんぞや。及そのいひせんんく

人これをあひせばかあふばコグエゴリとまのらんコグ父もかあふば

うまをのへーこれらまこりてまろうまてかまともよままらん。これを二十四

のひせざるのへコグエゴリとまのらん。まろもらんぢうグまくとまろ

ののへこれより又あふばいまーこれをはろたの父より也。

二十五 此れるかろんぢうとまも小まるとまこれといふ二十六まらめわいまらち

聖神。父コグ各ようてはろたんとまののへまこのろくの

まーとめつてるんぢうとあまててるんぢうとまてコグのみまころを

いとぐくおぢ人のいぢめんと也。二十七 此れへおんとめつてるんぢうよのこー

あきてコグへおんとめつてるんぢうよあこらんコグらんぢうよあこらん

せけんのあこらんグいとぐく又あふばらんぢうグころコグらよいとろま

コグのよぶばのまづー 第一回 四一六

おそろくしるわれ。これ二十六もゆきてあうちまきとんとりあらん
ぢとこれをさくしり。ゆいれをのへせはたあをち日れ父又かると
ゆいなるハらんぢとくあぶぢこれをよるとぶ父日れよりあひるると
ゆてあり。

二十九ゆいまごるふぢちて日れさきぶらんぢとよつけしりちごよるふ
らんぢとらんぢぢ。これ三十のちあわきののをゆて日れらんぢとよいをぢ
けぢけせはんのさきとてさくして日れはあへくるしなり。三十一はる
くふぢありせけんをちて日れ父をのへ又父のゆいはけよとくあり
てちうちてあてあふとちてい。いざつきて日れとちも又ゆん。

第五章 一節日れまとのぶさうの本日ゲ父をけつり。日二をどのあひく

ミとむはなざるのハかまこれをさらぬミとむはなざるのハこれをなて

めてゆいへミとむはなせりか。ゆい三らんぢとよぶつふさうのエンコ

父^九日れをのへたるグエ^十く日れもまへるんぢとせのへり日グのへ
たるエをつね^{十一}又せよ。るんぢと日グいまゝめをまのふ^{十二}たあたち日グ
のへたるエを^{十三}はひ^{十四}又せんこれ父のいまゝめをまのりてまう^{十五}あてうれ
グのへたるエをつね^{十六}又たるグエ^{十七}。これ^{十八}はエをるんぢと又^{十九}はひ^{二十}り
ゆつて日^{二十一}がよ^{二十二}とび^{二十三}なんぢら^{二十四}がまう^{二十五}又ぞん^{二十六}ト^{二十七}まう^{二十八}あて^{二十九}るんぢと^{三十}がよ^{三十一}とび
まん^{三十二}そ^{三十三}く^{三十四}せん。

日^{三十五}ぐるんぢと^{三十六}せのへ^{三十七}り^{三十八}なる^{三十九}グ^{四十}エ^{四十一}く^{四十二}るんぢと^{四十三}も^{四十四}ま^{四十五}へ^{四十六}の^{四十七}ひ^{四十八}とも^{四十九}又^{五十}の^{五十一}へ^{五十二}せ^{五十三}よ
と^{五十四}これ^{五十五}日^{五十六}が^{五十七}いま^{五十八}ゝ^{五十九}め^{六十}あり^{六十一}。人^{六十二}とも^{六十三}の^{六十四}よ^{六十五}め^{六十六}又^{六十七}の^{六十八}ち^{六十九}を^{七十}ま^{七十一}てる^{七十二}ハ^{七十三}これ^{七十四}より
あ^{七十五}わ^{七十六}ひ^{七十七}る^{七十八}の^{七十九}へ^{八十}た^{八十一}エ^{八十二}す^{八十三}。る^{八十四}ん^{八十五}ぢ^{八十六}と^{八十七}日^{八十八}グ^{八十九}あ^{九十}て^{九十一}そ^{九十二}い^{九十三}ひ^{九十四}つ^{九十五}ける^{九十六}と^{九十七}ころ^{九十八}を^{九十九}せ^百ば
た^{百一}あ^{百二}ち^{百三}日^{百四}グ^{百五}とも^{百六}なり^{百七}。いま^{百八}よ^{百九}りの^{百十}ち^{百十一}これ^{百十二}る^{百十三}ん^{百十四}ぢ^{百十五}と^{百十六}を^{百十七}ま^{百十八}あ^{百十九}と^{百二十}
さ^{百二十一}あ^{百二十二}た^{百二十三}ば^{百二十四}も^{百二十五}あ^{百二十六}と^{百二十七}こ^{百二十八}わ^{百二十九}りの^{百三十}ま^{百三十一}る^{百三十二}と^{百三十三}ころ^{百三十四}を^{百三十五}ま^{百三十六}ふ^{百三十七}さ^{百三十八}る^{百三十九}又^{百四十}よ^{百四十一}う^{百四十二}て^{百四十三}ま^{百四十四}これ^{百四十五}る^{百四十六}ん

ぢと^{百四十七}と^{百四十八}とも^{百四十九}と^{百五十}る^{百五十一}ふ^{百五十二}日^{百五十三}グ^{百五十四}父^{百五十五}より^{百五十六}ま^{百五十七}く^{百五十八}と^{百五十九}ころ^{百六十}の^{百六十一}の^{百六十二}へ^{百六十三}ま^{百六十四}く^{百六十五}る^{百六十六}ん^{百六十七}ぢ^{百六十八}と

とあなばあもあをわくのまるところとあふさるゝよつていふにれん

ぢととともとさふにが父よりまゝとさるのめいへいぐくせんぢと
又とと一めとるゝよつてあり。せんぢと^{十六}れをさふびとる小あふば
のまゝにれんぢとをさふびてたてありめつていづくをいせを
あうちてまつねよぞんむあをち日が名又よつてたんでるも
父小のあふれおたるんぢと小あふば。

^{十七}これこれとめつてせんぢと小いひつかるせんぢととてたがひ小あふせ
か。せけん^{十八}せんぢととあふさるんぢとかまにれをせんぢと小さきふ
てあふさるゝとる。せんぢと^{十九}せけんよりのめれるがせけんあふち
あふ小ぞくまのめのをあふさるんぢとせけんよりのめれるが
これのまゝにせけんのうちよりせんぢととさふびとる小よつてせん
せんぢととあふか。こが^{二十}いさゆるあもあをわくのまゝよりあひるゝととの

よふしりさるゝのまゝに

巻一五章

四十八

ちうまふ

二十六

にがつらなさんとまゐるのるぐさめねーまゐるちうまとのこゝろの父より

いぬののれをでよきとてバクあふばにがこの又あやうとせん。 二十七
ちうまもまへあやうとせんとまゐるちうまのれよりにがとともよまゐる
よようてあり。

第十六章 一節 これこれ工をのつてるんぢうよつてにあくまるにうらむ。

人むゝるんぢうとよりのひをよりあひだしてまへまきれきうりて
るんぢうとこそその入これをのつて能又つらまうりせんとおめふ。
かれとこまをまゐるふハ父とにがとをまゐるゆゑなり。 四 されこれを
のつてるんぢう小はげるときのまゐるにがひひくとをかぢへず。 五 ちう
めよりなんぢう小いたさるハにがるんぢうととも小あくとめつて
あり。 五 にがいまにがれにがをつらなそのれよりかふんとせ。なんぢうも
にがをいづなゆくとまゐるのれなり。 六 にがにが工をるんぢう小

なまのり

第十六章

四十九

いふにようてるんぢうがきもうれのミラ^七り。えうれども^七日^七ま^七を
のうてるんぢう小つげ^八日^八がゆきさるハるんぢう小^八つ^八のり^八だ^八
日^八れ^八ゆ^八べ^八ん^八バ^八な^八ぐ^八さ^八め^八ね^八ー^八き^八こ^八ぶ^八ゆ^八け^八バ^八ま^八る^八ち^八か^八ま^八を^八は^八う^八の^八さ^八え
と^八ま^八。か^八ま^八ひ^八た^八ぶ^八つ^八ま^八を^八の^八つ^八て^八ま^八を^八の^八つ^八て^八た^八ま^八を^八の^八つ^八て^八せ^八ん^八を
ひ^九さ^九め^九せ^九め^九る。は^九ま^九を^九の^九つ^九て^九よ^九つ^九て^九せ^九ん^九日^九れ^九と^九え^九ん^九せ^九ば^九ま^九を^九の^九つ^九て^九よ^九つ^九て^九日^九れ
又^十よ^十う^十る^十る^十ん^十ぢ^十う^十も^十ま^十こ^十じ^十ま^十を^十え^十ん^十だ^十。ま^{十一}ま^{十一}と^{十一}の^{十一}つ^{十一}て^{十一}よ^{十一}つ^{十一}て^{十一}は^{十一}せ^{十一}ん^{十一}の
ま^{十二}ま^{十二}た^{十二}ま^{十二}ま^{十二}く^{十二}。

^{十二}日^{十二}れ^{十二}る^{十二}か^{十二}わ^{十二}わ^{十二}く^{十二}の^{十二}え^{十二}ー^{十二}る^{十二}ん^{十二}ぢ^{十二}う^{十二}小^{十二}つ^{十二}げ^{十二}日^{十二}あり^{十二}ま^{十二}ま^{十二}今^{十二}な^{十二}ん^{十二}ぢ^{十二}う^{十二}これ^{十二}を
え^{十三}の^{十三}び^{十三}と^{十三}の^{十三}ま^{十三}ま^{十三}だ^{十三}。た^{十三}ぐ^{十三}か^{十三}の^{十三}ま^{十三}ま^{十三}の^{十三}た^{十三}ま^{十三}ー^{十三}ぬ^{十三}ま^{十三}こ^{十三}ぶ^{十三}え^{十三}る^{十三}ん^{十三}ぢ^{十三}う^{十三}と^{十三}ま^{十三}ち
び^{十四}ま^{十四}て^{十四}ま^{十四}か^{十四}ま^{十四}と^{十四}の^{十四}ま^{十四}ま^{十四}ろ^{十四}へ^{十四}ま^{十四}ま^{十四}ー^{十四}む^{十四}う^{十四}ま^{十四}ま^{十四}づ^{十四}ら^{十四}ひ^{十四}ま^{十四}あ^{十四}ら^{十四}べ^{十四}ひ^{十四}ま^{十四}ー^{十四}
ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}と^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}の^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}つ^{十五}て^{十五}これ^{十五}を^{十五}ひ^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}ま^{十五}ま^{十五}を^{十五}の^{十五}つ^{十五}て

るんぢう小あまさんとま。かま^{十四}う^{十四}る^{十四}る^{十四}日^{十四}が^{十四}あ^{十四}る^{十四}ま^{十四}ま^{十四}と^{十四}の^{十四}つ^{十四}て^{十四}る^{十四}ん^{十四}ぢ^{十四}う^{十四}
^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}と^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}の^{十五}つ^{十五}て^{十五}これ^{十五}を^{十五}ひ^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}ま^{十五}ま^{十五}の^{十五}ま^{十五}ま^{十五}を^{十五}の^{十五}つ^{十五}て^{十五}

それを足るといひたるをらんぢうのひとも小ふや。 ^{二一} されまじおんぢう
らんぢう小つげんらんぢうをへるきてうほまんとせ世けんハよろこぶらん
ぢうをへうまんとせまらんぢうがうまひよろこびまなる。 ^{二一} おんるハ
さんのおふまのうちうまひありそれとまきまるとめつてあり子と
うまれてのちそのんかまをまへおむかふばせけんよりちんうまれたる
とよろこぶゆゑなり。 ^{二二} かくのまぐるんぢう今うまひのりたぐられらん
ぢうとまへる此をもちらんぢうがきもよろこぶらんぢうがよろこび
ハこれもこれをうまふとす。

^{二三} かの田らんぢう日まよのどあるところす。 されまじおんぢう
よつげん日が名よよつて父よるにものどお父うるふばらんぢうよ
のらん。 ^{二四} 今まぐのどあるところハいま日が名よよつばりまのどあよ

此をもちるのつてらんぢうがよろこびまなる。 ^{二五} されまじおんぢう

のひびきをくひまるんぢとせんぢるう。かとうかときききくんときてひま
ちでよきくするんぢとちりさしておのくおのまぐととろ小かかりて
これをひどりのこくかくるまじもひれひどりとるよあふば父口と
とも小むるあり。日^{三十二}はひるをゆつてるんぢとよつびてるんぢとひれを
ゆつてやま^{三十三}とせんとちりせ。せけんよゆつてるんぢとうまひるやまのり
ちりれどもとろよきるれよこれまじとせけんよかつこり。

第十七章

一節

及そひいせたりて月とゆげて天とゆきひびきをく父いとまの
いこりこりねがたくハのま^{三十四}けむせをさよりかやうせよゆつてむせ
もま^{三十五}ゆるこをかやうせん。ゆるこまじとこれよひきあひとたまへて万
まんをほろまじとてこれまじりるまのちとゆろくゆあ^{三十六}これ
ゆあま^{三十七}とろの人よあなんとちりまるととりよ^{三十八}ゆへよ。かぎりるま

のちハのあ^{三十九}ひどりまじとゆこりま^{四十}及そんれま^{四十一}ゆあ^{四十二}ゆあ^{四十三}

のたふささるの人はあなさんとわつまるさとりより強へよ。かぎりなき

いのちへのあへひどりまに非なりまへ及そんれまをのあへつらえ
なるものをさるへるり。されせけん小切のあへとかがやうしてあへ
されよるせよとさげなる日ざへ日進まづくにこれをすなり。父い
今日進をゆあへあのをめつてまあたら世けんせぶさるさまされ
のあへとまゆ又さるのさるをよめてかぎやうせよ。

のあへせけんよりされ小へなる人小されあへこの名をゆらりなり
まづくよあへけん人なるゆあへかまらとされよあななりかれともま
あへこのエゴリをまのりてのあへされにのへなるハミかあへより
あるとありなり。のあへ日進ま又さげけるささるのエゴリへ日進かれら
小さげてかれともこれをうけてまて又日進あへよりいづくるとあり
てかつのあへされをつらえりなるとまんトなり。されかまらぐためよ

第十七卷 五十二

のまゝまゝうまうまぐをなをのつて日れをまんぜんとまゝのれとあま
 せのつてでーまかひとらよりのてまあをち父こがうり小これ父の
 うらよあるぐごくかまともまへ日れとがうらよひさうよるべーか
 のごくせけんあゝ日れをつらをけ正をまんむる。^{三十二}あゝ日れよのこある
 さうりハこれこれをかまともあゝてまかひとらよりのて父とこれと
 ちうじめんとなつて。^{三十三}これうまらよりのてあゝ日れよのりてのうら
 をまてひとらよのあてまうまき人とまじめんまあをちせけんあゝ
 日れをつらをてかまともあゝと日れをのあゝまゝぐごくうらと
 あるべー。

^{三十四}父のあゝがたぐハあゝ日れよのあゝのう日れとまゝとまゝはて
 のあゝ日れよのあゝのさうりをあせーめまけどーせまんひらくの

さまのあゝまゝまゝ日れをのへーなり。^{三十五}まゝある父の世けんあゝとを

あいのねがたぐハ... 日れよあたるの人日れとさうとさもはて
あかへ日れよあたるのさうりとをせしめよけごとたんひらくの

さきあかへまぐよ日れをあへり。 三十五 さぞある父い世けんあかへを

あふばへ日れあかへをあるこれともまこのあかへ日れをはうたへるを

ある。 二十六 日れまぐよあかへの名をゆつてかまはし小あゆしてさうあそ

まへこまをあめまゆつてあかへの日れをあへむるのささけかまはし小

あかへ日れもまへかまはしうさうよとるべ。

第十八章 一節 多そのいひをたりてていとさも小いぐけてらんさこを日り

あひてそのわりてていとさもよこれよりあふ。 二 ああうさうるの

よぶまきへをれとらとありてようて多そていとさもよまぐくそよ

ゆりま。 三 よぶままのほをのれあかへまきりつらこのくらふこま

まものやくあんといひきてこのまのとさのいびとわこやりとをゆつて

いたる。 四 多そのろくのあたんエをありていぐあかりてさひていひ

然るくこれをいふるや。いとくまざれの人及そと。及そのいひ
 然るくこれこれり。ちちやうせうらのよむもゆりくととも
 ころ。及そこれこれりといへばちちちゆりくととも
 ころ。及そまことひていひ然るくまざれの人及そと。及そのいひ
 然るくまざれの人及そ。及そのいひ然るくまざれの人及そと。及そのいひ
 これりといひころ。いとこれをいふるはむのりゆりゆりて
 さらせよ。かくのいひと及そのゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 されもうちあふと。いといひ然るくまざれの人及そと。及そのいひ
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 といふていひ然るくまざれの人及そと。及そのいひ
 といふていひ然るくまざれの人及そと。及そのいひ

十二
 といふていひ然るくまざれの人及そと。及そのいひ

△ちてあううあてのくむへてろあかづく△ちてのくむ。

あかまのりつらさてーとあまへとれ工をのつてあそよあふ。^{二十九}あその

こをへてのひあそく日れ世けんあふよひひり日れつねよより

のひやとてらとよごもはひあゆつまるささろよあまへてひそろよる

もいたげり。^{三十一}るにそれを日れよあや日れをさくのれよあよかきり

日ぐひあささろをる。^{三十二}ひあそあひあささろらよさろのやくあんさか

うらあてあそよ△さてのさくらんぢあかまのりつらさよこたある△

かくれ△くさるや。^{三十三}あそのひあそく日ぐひあさのさきさきへそれ

あさきとあやうこせさよさきさきへるんを日れをうらんや。^{三十四}

あそまぐくよあふれてあんまをこれをあかまのりつらさくやあふよ

日たれ。^{三十五}あそよあまのんへてろさろてのくむ。あらんこれよさろてひあく

らんぢまのひ人のでーよあふばや。これうけあふばあてあふばとひよ。

三十六

及そ此之よきを以てのんむをこれをわがまなりつらさうやふえよ
日たぬ。とまよまのんへてろううてのんか。ゆるんこれ又ううてのんく

二十五

るんぢまへ人のてー又あふげや。これうけがたげあてあふげといふ。

二十六

わがまはりつらされあもあをこありてあをちかたへてろよまきされる

のくあんどくいのたぐこれそのああてるんぢかまとも小まるとあへる

二十七

小あふげや。へてろまへうけがたげ。あをとりあをちるまを。

二十八

わがまのめろく及そをひきてうやふえよりせへあよいさるめろく

せへあよいらげがらほてあうあそまきそのまうりせへあよいさるめろく

二十九

あをるとあをる。ひらとらひくかまよよいあてのたぐあんぢとあをのめろ

ては人をうのさあるや。こへてのたぐかたさかあんよあふげんば日れよ

三十一

あをちちかまをるんぢよ日ままげ。ひらとらひをくあんぢとこれをとり

てるんぢとぐあうあうのまをり小これをくせよ。よこまものいたく

三十二

日れよあまのよきをさるるまをあを。こをのめつてあそあうりあをあ

あまのよきをさるるまをあを。こをのめつてあそあうりあをあ

まゝをのつて取せんときをといひ強ひたる小せうトあり。

^{三十三} ぴらとつあふふさなびせのふ小せうんで及そとよびていたくおんぢ

よごものつしう。及そのいひ強んくおんぢは工をいふハおのまより

うをもく人日言をのつておんぢ又つげたるや。^{三十四} ぴらとがいたく

これよあ入り。おんぢおのまとまたりつらさのうらごもとおん

ぢをこれ小日こりあり。おんぢおのまとまたりつらさをとるや。^{三十五} 及そのいひ

強んく日ぐん又はせけんより小あふば日ぐおこれ世けんよりおんぢ

日ぐお下うあふばいさまこらひてこれをあてよあごも又日こり

めふれだのまごらぐん又こより小せだ。^{三十六} ぴらとがいたくあふばおんぢ

おんぢ日こり。いひ強んくおんぢこれをしといふこれこれゆへ小うまれて

これゆへ小せけん又なだりてまとのこあふあやうこせんとあふばおんぢ

まじよりのめれ日ぐんをさきくあり。^{三十七} ぴらとがいたくまじよハかん

これゆへ小せけん又なかりてまことのこゝろ又あやうこそんとあつたゆゑを

まことよりのめれどがそへをまゝなり。 三十八 ぴらとグのたぐまことハなん

ぞや。いひをとりてまこといふよこどもよりたぐひ人のあやまちをいふ

いふ 三十九 ちぎとゆるせうよらんぢと小あうぞくのり一人りのさらたれと

ゆるまべーらんぢこれよこどものこととゆるさんとあつたるう。 四十 いか

よなくりていたくひ人のいふいふをををを。それをををハあひたぎなり。

第十九章 一節 ぴらとつあ又あそととりてこれをむらうつ。 二 けのれぶもうをら

あてかぶととんまてかあなれうぢてむらまきころもと 三 させていたく

よこどもの口うへへのんうか。 四 ちぎ又あてあううあてまあてこれをうつ。

ひらとまこいぢめろく。 五 いかていたくいふよりかひ人をらんぢと

グまふよりいぢてこれうぢグのあまらと 六 ぶさるとらんぢとよあまか。

あそうをらのかぶととうぢむらまきころもとまてありていぢ。 七 ぴらと

まゝさんぢをゆるまのりきわひのるとるや。及そのりひをくう人
よりさんぢよとまたるよふぶんばさんぢをるをち。これよのりよる

のりきわひな一ゆ人よこれをさんぢに口くはめつとていへくわひ
あり。これよのり^{十一}。ぴらとこれをゆるさんとつたれどもよこどもよをくり
ていなくわよをわのりとしとりの入うへませよそあくるんぢひ人
をゆるさばはるをちう入ませのともよふべ。^{十二}。ぴらとこれ工をまて及そ
とくがま入のりてまきり一と名づけてまらつ工を又うむくとりよ
とらよふらあよざせ。とまよはまぎこゆるせらのそる入用ひのひる
ひ。^{十三}。ぴらと入よこどもよりあてりなくまづさんぢちグとしてとんてう。
^{十四}。めろくよをくりてりなくこれをさふせよこれをさふせよまうめんど
よをりつけせよ。ぴらとグのりなくこれさんぢちグをちりつけるや。
まらりつらまけくいらまもててりなく入ませのめろよれらよしてす。
^{十五}。つめ又なをとりてこれをうまらよをりつけらるよとてはかまらこれを

すまのりよのりまのりまのり
第十一章
五十九

ひきてさる。

^{ナセ}及そぢうめんどのもりをあひひてめくものさられさるゝからい
 正なよることいよさるゝよりさるゝかゝこよこれをぢうめんどよ
 るりつけてニムン^{ナセ}とまほはてひとりとまぎりひとりとひだり及そ
 とるゝよさるゝ。ひらとグ^{ナセ}いれれがきしてぢうめんどのもりよつけて
 りたくよこまものどうまざれの及そ。^{ナセ}あわくのよこまほいれれを
 よかよつて及そをりつけるのささるゝさるゝあちうそれいれれハきこ
 ならいへまねろゆめどあてうきさるゝ。ま^{ナセ}つりつらされうらまも
 びらとよいあてりたくよこまものつしとかくこまろれあめきとよこ
 まものつしといひさりとま。ひらとグ^{ナセ}いれれくうきさるゝハまあまら
 うきさるゝ。

^{二十三}
 佐えのれまもまぐよ及そをりつけてめあわこのまのれとさりて

及そよいりてそれはまたよみ一紙ひたるを及てはねとせし
三十四
ひどりのはをのれををのりてのれはかこの口きをさけはるるち

血とまづともよのゆ。 三十五 なるのハをやうこまかまづあやうこハまこ

牙づらうのふとまとるをありてるんぢとるんせふ一か。 三十六 これとあり

て種又のれはかこのひとわめとらまはとりのかハせうトあり。 三十七 まへづ

種よのくかまらわのまらぐさけとららののそまへんんとせ。

三十九 それのちのままへの人よせふめとあり及そのでーまよへどもと

かをるくよよてひそろふまより 三十九 ぴらと小めとめて及そのかをねとせらん

とせぴらとこまをゆるげ。 三十九 つまよまこりて及そのくをねととる。 三十九

よこでもをドめて 四十 務らののひび及そよつきとるめれあつてゆゆやく

とろんふとませる 四十 への百きんとめちまくる。 四十 まよりハ及その

くをねととりてよ 四十一 ども のちうあるまうぞくよまごがめてめめん

ゆつてあわひんはりあてこれをは 四十一 け。 四十一 のれはかこのむりはひらるのさところ

よそれりそのくろく又のさしきつろりいまだ人わらむとるころ。
それ日よとまものそあへせの夕まははらのちろくるとよふてく
こよ及そとわらありたり。

第三十章

一節

七日のちのめの日をやのさしきつろりいまだ人わらむとるころ。
まぶれねつろよまきつろりてい一のつろ又うせるとしてつろよとて
はのんへてろとかれぶの及そのあひむるのでいとよひてのん
ねのうをねをはちよりさうていぐくよむくやとられらふべ。
とかれぶのでいとゆきてつろよあひむく。ふつろりつろりとかれぶ
のでいとろよりまへよりてさきつろよいたる。かふをよれてのん
ねのあきとるをよていふべ。はのんへてろまふびきつろりてはちよりて
のんねのくまきとるをよる。かふをよれてのんさきへめねねのとあるらう

せびのまきまきてづろのころよあきとる。つろよかたさきつろ小

... 第二十一卷 ...

せいかををあひさりくぐりぐんまわきくるやと日れ又つげぬ
これとあたらこれをとらんとせ。又そのいひぬをくま王や。かんる八又
とめかじていたくらぶ小とあつちま子あり。又そのいひぬをく
これいまで父又つきそのむらじれをさぐるこころまじしゆきて日か
まやうぶ小つげてこれのわりてこが父とあたららんぢとが父日か
非とるたららんぢとが非小つくといへよ。ま王やまぶれぬゆきて
又づらとぬく又そとをぬかかへ非母のいひぬをいへることをも
ゆきてでー小つげあり。

十九
かると日とあたら七自三のむらめ日とぐく小んれてでーどもよ
どもとあされてあつちりせるところ小のんよとゆるとき又そまきりて
るうよとらていひぬをくらんぢとへかんとれよ。いひぬよとまよも

二十
こきもあまし小八世ぬひてでーどもぬくをてとあたらようどぶ。

為るくゝんぢとへんのなれよ。^{三十七} つゝ又とまたよひあてひ為るくゝん

ぢがゆびとこふさゝりむとをりて日ぐまとさぶれよゝんぢがまと

こくよのびむとをりて日ぐまとさぶれよゝんぢがまと

ゝるまゝとゝんぢるのれのと。とまたをてのたぐ日ぐまゝか日ぐま

か。又そのひひ為るくゝんとまたをいゝんぢ日れをんゝる又よつてゝん

と。日ぐまとまゝとゝんぢとゝるのゝさゝるひあり。

又そでゝまものゆゝせん又ありてづつ又むむのてんとてを

母とあひ為るひてはゝまゆゝのゆゝとゝんぢとゝるのゝ。とまゝとゝる

なんぢらとゝて又そまのむむとゝんぢとゝるをゝんぢとゝる

ゝんぢとゝるまゝとゝんぢとゝる各又むむのちとゝる

第三十一章

一節
それのうちてまゝやのうゝん又ありて又そまゝとゝる

てゝにのらゝゝ為るひてそれむむとされるゝかゝのゝ。とゝんへて

第二十一章

一節

それ^一のちてべ^二やのうへん^三よりて^四及そ^五ふ^六こ^七び^八あ^九のま^{一〇}と

でーにあらをー^一あひてそ^二れ^三ぬ^四と^五され^六と^七かく^八の^九ど^{一〇}。 ^二せ^三め^四ん^五へ^六て^七ろ

と^一で^二ぐ^三も^四と^五あ^六の^七と^八あ^九ま^{一〇}と^{一一}が^{一二}ま^{一三}の^{一四}う^{一五}か^{一六}人^{一七}あ^{一八}あ^{一九}あ^{二〇}及^{二一}と^{二二}ず^{二三}べ^{二四}い^{二五}い^{二六}が

ふ^一こ^二り^三あ^四は^五こ^六づ^七よ^八ニ^九人^{一〇}の^{一一}で^{一二}ー^{一三}と^{一四}あ^{一五}あ^{一六}ぐ^{一七}く^{一八}の^{一九}り^{二〇}。 ^三せ^四め^五ん^六へ^七て^八ろ^九が

い^一た^二く^三い^四れ^五う^六と^七く^八と^九ら^{一〇}と^{一一}ゆ^{一二}く^{一三}こ^{一四}か^{一五}り^{一六}を^{一七}く^{一八}い^{一九}れ^{二〇}と^{二一}も^{二二}よ^{二三}ゆ^{二四}ん^{二五}。 ^四つ^六あ^七よ

い^一ど^二ぐ^三あ^四ね^五又^六の^七り^八り^九て^{一〇}そ^{一一}れ^{一二}あ^{一三}へ^{一四}え^{一五}る^{一六}と^{一七}ろ^{一八}う^{一九}。 ^五せ^六ぐ^七よ^八あ^九ー^{一〇}た^{一一}及^{一二}そ

あ^一ち^二又^三と^四ち^五て^六で^七ー^八と^九も^{一〇}ハ^{一一}そ^{一二}れ^{一三}及^{一四}そ^{一五}と^{一六}る^{一七}と^{一八}ふ^{一九}だ^{二〇}。 ^六あ^七そ^八の^九い^{一〇}ひ^{一一}あ^{一二}ん^{一三}と^{一四}く

こ^一が^二子^三と^四も^五う^六ま^七の^八れ^九わ^{一〇}る^{一一}う^{一二}い^{一三}く^{一四}す^{一五}。 ^七い^六ひ^七あ^八ん^九と^{一〇}く^{一一}の^{一二}ま^{一三}を^{一四}あ^{一五}ね^{一六}の^{一七}ま^{一八}が^{一九}り

に^一う^二て^三あ^四え^五る^六べ^七ー^八。 ^八う^九ち^{一〇}て^{一一}あ^{一二}あ^{一三}ち^{一四}の^{一五}ま^{一六}を^{一七}の^{一八}げ^{一九}る^{二〇}と^{二一}の^{二二}こ^{二三}ま^{二四}だ^{二五}う^{二六}と^{二七}あ^{二八}わ^{二九}る^{三〇}る

ゆ^一く^二ま^三り^四。

か^一れ^二及^三そ^四の^五い^六ま^七る^八で^九ー^{一〇}ハ^{一一}へ^{一二}て^{一三}ろ^{一四}又^{一五}これ^{一六}あ^{一七}ー^{一八}ま^{一九}り^{二〇}と^{二一}い^{二二}ふ^{二三}。 ^九へ^四て^五ろ^六ま^七だ^八ら

は^一て^二これ^三あ^四ー^五ま^六り^七と^八ま^九ま^{一〇}ま^{一一}る^{一二}ち^{一三}う^{一四}と^{一五}く^{一六}と^{一七}り^{一八}ま^{一九}ね^{二〇}と^{二一}つ^{二二}ら^{二三}ね^{二四}う^{二五}ま^{二六}ま^{二七}と^{二八}ま^{二九}が

よ^一と^二し^三の^四よ^五う^六ま^七の^八ま^九づ^{一〇}と

第^一二^二十^三一^四章

六^一十^二三

八
 なる。それのとり入こぶひのりうをくはくむのめを成ひ経てまくる
 けざりあつよりむるれるとさむくゆふのぐ二百まやぐ。あつ^九又
 のやりてゆちとゆゆるまのうへようをゆるとる。又そのゆひ⁺
 ぬえくいまさきとるのうをうらゆちまされよ。せのんへ^{十一}てろがゆきて
 のまをあつ⁺のうへひきのやりてあつひるうをゆるうぞる又百の
 十三。うをあつ⁺きといへどもあまさはだ。又そのゆひぬえくまきり
 くらへよ。ていどもへのひてあつ^{十三}これぞやとよゆれりけざりそれ
 ね⁺るいとる。又そ⁺またりてゆちとまりてかまふ又あつ⁺ぬふ
 うをもまかくのゆい。又そ^{十四}ぬいぬふよりゆきうててい⁺又
 ぬらされるハこま^{十五}のニどまり。

十五
 ちうくーせをりて又そへせのんへてろよゆてゆひぬえくよまぐ

ゆいこせのんいんぢこれをあへせるハこまよりまきるや。ゆいこ

たはむれる入て進む云と云う

十五

あふくーせたりて及そハせぬんへてろよりあてりひあふくよるが

むはとせぬのいゝんぢこれをおのむるハて進よりまゐるや。したく
あふりまゝハこれのおこをおのむる工をありあふ。ひひあふたぐにが小
ひつとをやまゝ入よ。まゝでいニせりひあふたぐよるがむはとせぬのい
ゝんぢこれをおのむる。したくあふりまゝハにがのおこをおのむる工を
ありあふいたぐにがひつとをやまゝ入よ。まゝでいニせりひあふたぐ
よるがむはとせぬのいゝんぢこれをおのむる。へてろをれニせこれ
おのむるやとせりあふゆへようれひていたぐまゝ工をまかりてこれ
あふくをおのむる工をありあふ。及そのひひあふたぐにがひつとをや
まゝ入よ。これまゝとあふよゝんぢにづいんぢにらまゝとまゝ又づらあひ
とほらねてあふむるよるがひてあふらあてゆきこりあひるよあふひ
てゝんぢまゝよまゝとのびて人よつらねらまてゆんんとあふせざるをころ

十六

十七

たはむれる入て進む云と云う

第二十一卷

六二四

又ひうれていふんと申。これ^{十九}をいひ給ふへへてろまんのいさるをのりて能とさうりかやうさんと申るをゆびざら。及そまのいひ給ふとくこれ^{二十}又まごうよ。

へてろ刃をめぐらしてかた及そのあへー給ふでーまごうをいさる申るたちむんちうく申るさき及そのむち又よりつきてさきあるなをうらんと申るのれたれぞやまのれり。へてろ^{二十一}これをいさる及そ又

とひていたくさきい人むのうん。及そのいひ給ふとくこれのい人^{二十二}こがまごうをまごまりまのいをわんせがらんぢにまんのあづかるいと

あらん。まんぢたごこれ^{二十三}又いながへよ。こよりさやうふのうらひ言

のいひろまりてかたでーいせまんと申とまごも及そくまごいせまんと申といひ給ふとく又あはれまごこれのい人こがまご

まごまごまりまのいをわんせがらんぢにまんのあづかるいとあふんと申。

せざらん」と申し、ひびき、いさむる。又あふび、^二これの一人、^一日かきまゐる

まてさきまり、まの工を初めせざるに、さんのあづかる。工あふんと、のま。

これをあやうこそあやうこそ、これをうきある。ぬのへ、^二さるち、^一かたで

いり。かつ、^二これら、^一それあやうこそ、ことなるとある。そま、^二べつ、^一又、その

あわくの、かこ、あひ、^二さる、^一工も、あり、い、^二これ、^一を、う、け、^二日、^一か、あ、ゆ、^二又、^一それ

く、く、^二さ、^一ま、ゆ、め、^二う、^一せ、^二けん、^一又、の、ま、る、に、^二へ、^一む。あ、め、ん。

約翰傳福音書終

二二一 二二二

三才圖會卷之二十一

第二十一卷

六十五

1002717765





